

企画展 「戦争と大学 ふたたび

——軍医と銃後——」

蒲 生 英 博・堀 田 慎 一 郎

はじめに

一 鶴舞における企画展「戦争と大学 ふたたび」

(一) 「戦争と大学 ふたたび」開催までの経緯

(二) 企画展のテーマとタイトル

(三) 準備に際して解決すべき問題と開催時期

(四) 展示内容とその特徴

(五) 特別講演会と祖父江逸郎名誉教授との面談

(六) 企画展の反響

二 東山における企画展「戦争と大学 ふたたび」

(一) 開催決定までの経緯

(二) 準備作業の概略

(三) 展示内容とその特徴

むすびにかえて

はじめに

本展示記録は、名古屋大学で開催された企画展「戦争と大学 ふたたび―軍医と銃後―」について、内容、開催に至るまでの経緯、準備過程、展示への反響などを紹介するものである。

本稿で言う企画展「戦争と大学 ふたたび―軍医と銃後―」は、正確には時期や場所、内容も異なる二つの展示会両方を指している。一つは、二〇一六（平成二八）年六月一〇日（金）から九月三〇日（金）までを会期に、鶴舞キャンパスの附属図書館医学部分館二階入口ホールにおいて開催された、同分館による第一三回ミニ企画展である。もう一つは、二〇一六年一月二五日（金）から二月二六日（月）までを会期に、東山キャンパスの中央図書館二階ブリオサロンにおいて開催された、大学文書資料室と附属図書館医学部分館の共催による企画展である。これまで大学文書資料室は、学内の他部局の共催によって、まとまった会期を設定した特別展や企画展を六回開催してきた。五回までは博物館との共催であり、会場も同館の展示室であったが、六回目は初めての試みとして、企画展「戦争と大学―一九三一―一九四五 官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学―」を、附属図書館医学部分館との共催で、会場は中央図書館ブリオサロンで実施した^②。

この企画展「戦争と大学―一九三一―一九四五 官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学―」は、共催者の一方がまず単独で開催し、その後で単独開催の内容を拡充しつつ、しかも別の場所で共催として実施するという、おそらく全国的にかなり珍しいケースであった。また、同じ大学の二つのアーカイブズの共催展という稀有な事例でもあった。本企画展もこれと同じである。

ただ本企画展は、主題も二〇一四年の企画展「戦争と大学」と同じで（「ふたたび」は付いているが）、副題のみが異なっている。同じ主題の企画展を、副題を改めて行うという試みは、大学文書資料室では初めての経験であるし、全国的にも珍しい例に属するであろう。これも、本展示記録の意義の一つといえる。

なお、本展示記録の作成は、第一章は蒲生英博（附属図書館医学部分館特任専門員）、第二章及び「はじめに」「むすびにかえて」は堀田慎一郎（大学文書資料室特任助教）が担当し、とりまとめは堀田がおこなった。両者の担当部分に形式等の不統一や内容の重複が見られるが、あえてそのままにした部分もある。

一 鶴舞における企画展「戦争と大学 ふたたび」

（一）「戦争と大学 ふたたび」開催までの経緯

名古屋大学附属図書館医学部分館では、二〇一二（平成二四）年九月から二階入口ホールの一二mほどのスペースを利用して、ミニ企画展を開催してきた⁴。展示品は、すべて医学部分館四階にある医学部史料室と医学部分館が所蔵する歴史資料である。ミニ企画展の開催テーマ案は、常時一〇数件持っているが、一つのテーマにつき、揭示物も含めて三〇点ほどの展示品が揃う見込みとなつてから、本格的に準備を始める。開催テーマを決定する際に考慮すべきことは、展示品が文字資料に偏らず、またアカデミックになり過ぎない資料が揃うかということと、多種多様なテーマで開催することなどであるが、担当者（蒲生）の動機づけ、目的意識も、開催する側にとっては意欲的に取り組むための重要な要素である。

鶴舞キャンパスにある医学部分館が、第六回ミニ企画展「戦争と大学——一九三二—一九四五 官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学」を開催したのは、二〇一四年二月一二日（水）から六月七日（土）までであったが、その後も、大学文書資料室との共催により内容を拡充し、東山キャンパスの中央図書館を会場として、拡大開催した。⁽⁵⁾この企画展の反響は大きく、新聞やテレビなどによる報道もあり、市民も含む多くの人が観覧した。意見や感想が多く寄せられ、附属図書館の商議員からは「毎年開催してください」との要望もあり、元気づけられたが、一方、このテーマに関連した歴史資料を医学部史料室ではあまり所蔵していないことから、すぐには応えられそうにもなく、たいへん残念であった。

「戦争と大学」から「戦争と大学 ふたたび」までの二年間で六回のミニ企画展を開催してきたが、この間、「戦争と大学」に関連する歴史資料について、次の方法により、収集に努めてきた。①医学部史料室の所蔵資料を再度調査し、②医学部分館、特に四階に配架してある他大学史なども確認した。さらに、③他の国立大学図書館で不用となり無償譲渡として照会があった図書のリストを点検し、有用な図書の無償譲渡を受け、④名古屋大学全学同窓会大学支援事業の助成金⁽⁶⁾により関連図書を購入した。また二〇一五年には、⑤医学部卒業生の関係者等からの寄贈もあった。

これらの方法、特に医学部史料室の所蔵資料を確認することで、軍医という観点から企画展開催のめどがついてきた。

(二) 企画展のテーマとタイトル

展示資料が揃いだしたころ、企画展のテーマとタイトルを決めなければならなかった。

そこでテーマの一つと考えていた軍医について調べてみた。日本の軍医制度は明治初期に始まり、司馬凌海の師であつた松本良順と、森林太郎（鵬外）は軍医としても知られていて後に軍医総監になるが、この二人の著作は医学部分館にも所蔵している。しかし、本学との関わりを考えると、臨時附属医学専門部の設置が極めて重要であることがわかる。一九三一年の満州事変、一九三七年の日中戦争と戦争が拡大していくにつれて、軍医として召集される医師が増えて、医師不足が顕著となり、陸軍省などの要請により、医師の増員養成が国防上、国民医療上急務とされた。一九三九年に、帝国大学七校、官立医科大学六校に修業年限を四年とする臨時附属医学専門部が設置され、名古屋帝国大学臨時附属医学専門部には、初年度に七八名が入学した。企画展では、軍医とともに、国家総動員法に基づく国民徴用令が制定されて、直接戦闘に加わっていない一般国民も、間接的に何らかの形で戦争に参加していくことになった国内の状況も同時に展示することで、戦争が軍人、軍医だけのものではないことを描きかつた。こうしてテーマを「軍医と銃後」とした。タイトルは、二〇一四年に開催した「戦争と大学」の続編として開催することから「戦争と大学 ふたたび―軍医と銃後―」とした。回次の表現では少し迷い、三回目以降の開催も考えるならば第二回で良いのだが面白みに欠け、第二弾は避けたい表現であつたため、結局、團伊玖磨のエッセイ集『パイプのけむり』の続編のタイトルに倣つて、あまり堅苦しくない「ふたたび」を付けることにした。

（三）準備に際して解決すべき問題と開催時期

企画展のテーマとタイトルが決まつた後、解決すべき問題が二つあつた。

ひとつは二〇一四年の「戦争と大学」と同様に、鶴舞キャンパスでの開催後、大学文書資料室との共催により東山キャンパスでも開催できないか、という点であつたが、二〇一六年二月に照会し、すぐに内諾があり、五月二五

日に正式に共催の承認が得られた。また並行して、前回同様、会場を中央図書館二階のビブリオサロンとすることを考えて、四月に年末の空き状況を確認し、一月後半から二月末まで仮予約を行った。

もう一つの問題は、企画展開催中の特別講演会⁸⁾をどのように開催するか、という点であった。過去三回開催した特別講演会ではすべて医学部を退官された名古屋大学名誉教授に引き受けていただいたが、できれば医学系ではない分野の研究者に依頼したいと考えていた。そこで、前回の「戦争と大学」の開催の準備作業中や、その後もご教示を受けていた愛知大学法学部の大川四郎教授に、二〇一六年一月に依頼したところ、快諾を得ることができた。

開催時期については、前回の「戦争と大学」では八月一日に拘らずに、むしろ集团的自衛権や安全保障に関する議論など、当時の国内外の情勢を考えて、できるだけ早めに開催したいと考えていた。二回目では、十分な準備期間の確保ができることを考えて、八月一日を含む期間に開催することとした。

(四) 展示内容とその特徴

展示した資料やパネルの個別の内容については、後掲の一覧表をご参照いただきたい。

展示資料の集め方の違いから大きく五つに区分して、それぞれの主な資料を紹介する。①医学部史料室に所蔵する資料の中から、池田謙斎著・藤田嗣章訳『子宮病論』（一八七八年）と、森林太郎講述『衛生學大意』（一九〇七年）は、著名な軍医による著作である。また、秋本文吾謹纂『光榮録』（一九二八年）は愛知県で行われた陸軍特別大演習にともなう昭和天皇による行幸の記録で、所蔵する図書館も少なく貴重な図書である。掲示板による展示資料として、名古屋帝國大學臨時附屬醫學專門部『入學生徒寫眞』（一九三九年～一九四四年）は、日中戦争から太平洋戦争へと戦争が拡大していくにつれて医師不足が顕著となり、医師の養成のために一九三九年に設置された臨時附

属医学専門部の入学生の写真を一枚のパネルにしたもので、毎年増えていく入学生のパネルを並べると異様な迫力がある。太田元次『戦前派病院長の回顧録』正・続（一九七九年、一九九二年）は、戦争中に名古屋帝国大学医学部附属医院に極秘入院した汪兆銘の主治医の一人であった医師による回顧録であり、汪兆銘の最晩年を知るための基礎資料である。②医学部史料室とは別に、医学部分館内に所蔵する資料は、本学以外の軍医に関する図書が充実している。満洲帝国軍医団『軍医団雑誌』（一九三五年創刊）は医学部分館では展示スペースが不足して創刊号しか展示できなかったが、第四六号には関東軍の軍医による、日本軍の細菌戦について言及した講演記録「細菌戦に就て」が掲載されており、東山では展示することができた。『佳木斯醫科大學新聞』第二号（第一回卒業記念号）（一九四三年）と白楊会編『満洲国陸軍軍医学校・五族の軍医団』（一九八〇年）は、医師の養成と確保が困難であった当時の満州における、日本による開拓地医師や軍医の養成学校に関する資料である。『碧素』国産ペニシリン開発の旗振り稲垣軍医少佐と一高生学徒動員（二〇〇五年）は、ドイツの潜水艦Uボートの中で発見した雑誌記事をもとに、太平洋戦争末期の困難な状況の中でペニシリンを開発した軍医の記録である。③他大学から無償譲渡された資料の中にも興味深い資料があった。『産業従業員の採用時身体検査法・定期健康診断法』（一九三七年）には、兵器、軍需品、火薬類などを製造した陸軍造兵廠と、海軍職工及鉦夫志願者、南満州鉄道株式会社などの身体検査規則が掲載されている。グロウ、アームストロング共著・畠中靖雄、間澤久雄共譯『航空醫學解説』（一九四四年）は、航空兵力の強化のために米国空軍の軍医の著書を翻訳したものである。④全学同窓会大学支援事業により購入した資料の中には、貴重な『名古屋帝国大学医学部アルバム』（一九四四年）がある。情報局編輯『寫眞週報』二六八号（一九四三年）には、「機械工を忘す女性のために」東京と名古屋に設けられた女子機械工補導所の内、名古屋鶴舞女子機械工補導所の記事が掲載されている。この補導所は、現在の名古屋工業大学の敷地の北東にあった。三

菱重工株式會社名古屋航空機製作所『兵器を造る我等の覺悟』（一九四三年）は、戦闘機の製造で知られる名古屋航空機製作所が内閣総理大臣兼陸軍大臣 東條英機の訓示などの放送、講演をまとめたものである。『名古屋市復興都市計畫圖』（一九四六年）は、市内の四分の一ほどを空襲により被災した名古屋市の復興計畫圖である。また、⑤前回の開催から二年間で寄贈された資料の中には、紙の資料に偏らない展示を目指すという点から見ても重要な資料があつた。例えば、官立名古屋医科大学を卒業後、満州の陸軍病院に勤務した軍医の遺品として、携帯用の消毒用アルコール入れ、薬剤、滅菌ガーゼ包などの衛生材料や、記名布がある。『昭和二十年三月 大東亜戦争戦災記念写真』と表紙に書かれた綴りが、二〇一五年に医学部の事務室で偶然発見され、医学部史料室に寄贈された。この綴りがまとめられたのは、一九五九年と一九六五年であるが、一九四四年三月に南京政府主席の汪兆銘が名古屋帝国大学医学部附属医院に極秘入院した時の主治医団や、一九四五年三月の空襲で使われた焼夷弾の写真があり、初めて見るものであつた。その他、一九三七年から一九四〇年までの同窓会の会報『學友會報』に掲載された「戦地便り」は、ページ数が多いためハンズオン資料とした。

なお、今回の企画展から、展示ケースを一台増やして三台とし、掲示板二台と合わせて展示したが、複雑な構成とはしないで、おおよそ年代順を基本として、テーマごとに資料を配置した。

（五）特別講演会と祖父江逸郎名誉教授との面談

企画展に関連した特別講演会は、大川四郎愛知大学法学部教授を講師として、二〇一六年九月三〇日（金）に、医学部基礎研究棟一階会議室2で開催した。大川教授は、西洋法制史が専門で、近年は、第二次世界大戦中の日本国内における赤十字国際委員会活動の実態調査を行っている。講演「第二次世界大戦中の赤十字と名古屋大学」では、

第二次世界大戦中の名古屋帝国大学医学部の卒業生らは、ほぼ全員が陸海軍の軍医として戦地に動員されたが、戦場で彼らが遵守を義務づけられた赤十字条約（ジュネーヴ条約）の内容を明らかにし、他方、当時の赤十字国際委員会駐日代表らによる日本国内の捕虜収容所および外国籍民間人抑留所の査察記録の中に名古屋大学が言及されていることから戦時中の赤十字と名古屋大学との関わりについて考えてみたい、というものであった。名古屋帝国大学は善通寺俘虜収容所に多数の洋雑誌を差し入れていたこと。また、愛知県愛知郡天白村字八事表山（現在、名古屋市天白区八事表山）に設置された愛知民間人抑留所には、イタリア国籍民間人が抑留されていて、彼らが疾病に罹った場合、当時の名古屋帝国大学医学部附属医院の医師らが治療を担当することになっていた、というエピソードが紹介された。

大川教授から、講演の準備段階で、祖父江逸郎名古屋大学名誉教授と面談できないか、という希望が寄せられた。祖父江名誉教授は、一九四三年に名古屋帝国大学医学部を卒業後、海軍軍医学校での訓練を経て軍医中尉となり、戦艦大和の乗組軍医としてマリアナ沖海戦、レイテ沖海戦に従軍した経験があった。大川教授は、戦前、戦後の名大医学部について不明な点を確認したいということであった。

そこで、筆者（蒲生）が祖父江名誉教授と連絡をとり、面談の可否、面談内容、日時と場所の調整を行った。面談は、五月二二日（日）午後二時から、大学文書資料室で、祖父江名誉教授、大川教授、堀田大学文書資料室特任助教、蒲生により行われた。質問事項は、旧制第八高等学校と名古屋帝国大学医学部の在学時代から、海軍時代を経て、復員後の名古屋大学医学部勤務時代までを三〇項目にまとめたものを事前に祖父江名誉教授に送付した。当日は短時間での面談を予定していたが、質問が多岐にわたり、戦艦大和の軍医の話を中心に二時間あまりの面談時間となった。

(六) 企画展の反響

医学部分館における企画展と特別講演会に対する反響は、様々なものがあつた。報道機関としては、いち早くフリーペーパーである中日シヨッパ―南エリア版が、六月一六日号の「今週のイチオシ」として「歴史は未来への教訓」というタイトルを付けて取り上げた。朝日新聞社名古屋本社の記事の取材による記事は、八月一六日の朝刊に掲載された。筆者（蒲生）もこの時期に各地で焼夷弾や空襲による被災写真を観覧する機会があつたが、同じ紙面に県内の資料館による戦争に関する企画展の記事が掲載されたことは、戦争について考える場を提供したいというこの企画展の目的にも合致したものであつた。報道機関によるものとしては、他に企画展と特別講演会の告知記事があつた。また、九月八日に朝日新聞社名古屋本社別の記者から、民間の戦争被害者などに関して取材があつた。大学文書資料室との共催による企画展に、杉山千佐子『おみすてになるのですかー傷痕の半生』を出品することになつたのは、この取材がきっかけであつた。杉山さんは二〇一六年九月一八日に一〇一歳で亡くなつた。名古屋医科大学（後に名古屋帝国大学医学部）の解剖学教室で標本作りなどの仕事をして、一九四五年三月二四日の名古屋空襲により負傷し左眼を失ったが、後に全国戦争被害者連絡会会長として、国からの補償がない民間の戦争被災者の救済を求めて長く活動してきた人である。

企画展は、市民が気軽に観覧できるように、医学部分館の入館ゲートの手前で開催するため、人数のカウントはしていないが、展示ケースの中の資料を直接手に取り見たい、という利用者が複数いて、会期後に対応した。

特別講演会は約六〇名が聴講した。講演後の質疑応答では、聴講者からの質問に対して、聴講していた日本赤十字社の医師や、国際関係法の専門家からの適確な回答があり、聴講者全体の関心の高さが伺えた。

二 東山における企画展「戦争と大学 ふたたび」

(一) 開催決定までの経緯

本稿第一章で解説されている、鶴舞におけるミニ企画展については、大学文書資料室（以下、本章では「資料室」と略記する）は全く関係していなかった。また、二〇一四年の企画展「戦争と大学——一九三二～一九四五 官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学——」（以下、本章では「戦争と大学」二〇一四」と略記する）の際のように、開催のきっかけとなる資料室への報道機関の取材といったものもなかった。

資料室が東山キャンパスでの企画展「戦争と大学 ふたたび——軍医と銃後——」（以下、本章では「本企画展」と略記する）に関わる発端となったのは、二〇一六（平成二八）年二月の、附属図書館医学部分館の蒲生英博特任専門員からの筆者（堀田）への打診であった。その内容は、鶴舞キャンパスでのミニ企画展の開催後、「戦争と大学」二〇一四の時と同様に、東山キャンパスでの企画展を共催するかどうか、またもし共催するとすれば、資料室に関連する展示資料があるかどうか、との問い合わせであった。

これに対し筆者は、個人の判断としては共催する方向で考えたいこと、また資料室には名古屋大学医学部の前身学校の卒業生で軍医になった人物の個人資料が所蔵されていることを伝えた。この段階では、資料室と附属図書館医学部分館による正式決定まではしなかったが、筆者と蒲生特任専門員の間で、鶴舞でのミニ企画展終了後、二〇一六年一〇月以降に共催する方向で考えることが合意された。東山キャンパスでの本企画展が正式に決まったのは、二〇一六年五月に行われた資料室の室会議^⑩のことであった。

その後、愛知県立大学日本文化学部長の上川通夫教授から資料室に対し、同大学で「戦争と大学」をテーマとする展示会を開催するので、そこで展示できる資料を所蔵していないかとの相談があった。これをきっかけに、資料室及び附属図書館医学部分館から資料を貸し出すとともに、両大学で情報を共有し、お互いの企画展等を関連企画として位置づけ合うことになった。最終的には、愛知県立大学日本文化学部事業「愛知人文社会ルネッサンス」の「愛知県史展と愛知文化遺産の探究」企画として実施された、図書館展示「愛知県史展 戦争と大学」^[1]及び岩井忠熊氏による公開講演会「戦争と大学」^[2]に、資料室及び附属図書館医学部分館が協力団体として名を連ねた。資料室にとって、企画展を他大学との連携の下に実施したことは初めてであった。

(二) 準備作業の概略

展示の構成、その他実務的な準備作業は、蒲生英博特任専門員をはじめとする附属図書館医学部分館の全面的な協力を得つつ、筆者（堀田）が担当した。

会場は、「戦争と大学」二〇一四と同じ中央図書館二階のビブリオサロンとした。中央図書館の入館ゲート手前という、多くの人々が通る場所にあることは魅力であるし、現実的に言っても、東山キャンパスで開催まで日がそれほどなくても予約ができる、ある程度広い展示スペースとなると、他にあまり選択肢がないことも事実であった。ビブリオサロンの設備の概略については、「戦争と大学」二〇一四の展示記録^[3]に譲るが、その時から特に変更点はない。

準備作業は、筆者が日常業務に追われていたのと、二〇一六年五月に退職した週三〇時間勤務の事務補佐員の後任が諸事情によりなかなか決まらなかったこともあって、「戦争と大学」二〇一四と同様にごく短期間で行わざる

を得なかった。実作業に入ったのは、一〇月一五日の第二回名古屋大学ホームカミングデーでの展示¹⁴が終わった後であった。

筆者が展示構成案を室会議に提示したのは、本企画展開始の約一〇日前であつて、室内で議論や検討をする時間が十分に確保できなかったことは反省される。結局、資料室から補充した展示品は、以前からの所蔵資料から選ばざるを得ず、展示パネルもかつて作成したものが中心になった。

展示物のキャプション（説明文）は、鶴舞のミニ企画展のものを基礎に、これを適宜修正して作成することにより、作業を大幅に短縮することができた。ただし、キャプションの形式は、東山での展示独自のものに統一した¹⁵。

「戦争と大学」二〇一四では、今回と同じように準備期間は短かったものの、東山での展示のきつかけとなつたNHKの取材や、準備作業中における学外からの問い合わせで人手でできた話題性のある新資料など、一般の関心を喚起できる展示品が複数あつた。しかし本企画展では、鶴舞のミニ企画展は新聞で報道されたものの（本展示記録第一章を参照）、東山の展示にはそういう動きはなく、やはり準備期間の短さの限界を感じた。宣伝も、ポスターは大学文書資料室のコピー機で印刷するものにとどまり、学内・学外への配布も十分ではなかった。

展示の設営作業は一月二日（月）から、筆者をはじめとする資料室のスタッフが中央図書館の協力を得ながらおこなつた。

（三）展示内容とその特徴

展示した資料・パネルのリスト、展示資料のキャプション、展示構成などについては、後掲の展示物一覧、会場見取図（イメージ）、写真、パネル画面をご覧いただきたい。展示パネルは、資料室の過去の企画展で使したもの

のや名古屋大学の広報誌に掲載したものなど、インターネットで閲覧できる場合は、画面の掲載を割愛した（閲覧方法は展示物一覧に掲載した）。

鶴舞のミニ企画展では、スペースは狭いものの、相当な点数が展示されていた。内容的には、企画展の副題である「軍医」と「銃後」関係の資料のほか、これも「銃後」の範囲ともいえるが、戦時下の科学技術動員関係の資料も展示されていた。

これらの展示物を再構成するにあたって問題となったのが、名古屋大学の歴史との関わりである。「戦争と大学」二〇一四は、副題に「官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学」とあるように、展示品は原則として名古屋大学の歴史に直接関わるものに限定されていた。これに対して、本企画展にはその限定はなく、「大学」とは大学一般を範囲としている。また鶴舞のミニ企画展では、「銃後」に関連するものの、大学とは関わりやすい展示物も見られた。附属図書館医学部分館（医学部史料室）は、名古屋大学医学部のみならず医学史一般のアーカイブズとしての機能を持つているから（注（3）参照）、そのような展示内容でも全く問題はない。しかし資料室は、その機能を名古屋大学のアーカイブズに特化させており、開催する企画展は、名古屋大学の歴史（名古屋大学の教職員・学生・卒業生の活動を含む）に即したものでなければならない。その意味で、今回の東山の展示では、名古屋大学に関する内容を強化する必要があった。

そこで筆者が利用したのが、資料室が所蔵する二つの資料群であった。

一つは、長谷川重一資料である。長谷川重一（はせがわ・しげかず、一八九六―一九九九）は、一九二二（大正一一）年に愛知県立医学専門学校（名古屋大学医学部の前身）を卒業して軍医となり、のちには陸軍軍医中佐まで昇進した。また軍医を務めながら勝沼精蔵の研究室で勉強し、一九三九（昭和一四）年には名古屋帝国大学から医

学博士号を授与されている。敗戦を北満州の陸軍病院の院長として迎えた長谷川は、ソ連軍に連行されてシベリアでの抑留生活を送り、一九四九年に帰国を果たした。その後、一〇〇歳まで現役の医師として、名古屋市の地域医療の発展に尽した。この長谷川の約八〇点の個人資料が、二〇〇五（平成一七）年にご遺族から資料室へ寄贈された。数は多くないが、その多くが戦前の軍医関係の資料である。この長谷川重一資料は、目録情報をオンライン資料検索システム（資料室のホームページ）に掲載し、特定歴史公文書等として一般公開している。¹⁷⁾

もう一つは、森岡家文書である。一〇〇余りから成る資料群で、二〇一二年度に資料室が古書店から購入した。この資料群は未整理で一般公開には至っていないが、その中に、一八八一（明治一四）年に愛知医学校（名古屋大学医学部の前身）を卒業して軍医になった森岡松太郎という人物の関係資料が含まれていた。

この二つの資料群の中から選んだ資料を展示することによって、本企画展の名古屋大学との関わりをより強めることができた。また、鶴舞のミニ企画展で『佳木斯医科大学新聞』^{（じやむす）}が展示されたが、長谷川重一が敗戦時に院長を務めていた陸軍病院も佳木斯にあったという、思わぬつながりも見つかった。

また、名古屋大学と軍医の関わりを考えるにあたり、戦時下の軍医速成のために設置された名古屋帝国大学（臨時）附属医学専門部（以下、本章では「医学専門部」と略記する）はきわめて重要である。鶴舞のミニ企画展にも、医学専門部に入学した生徒の顔写真が展示されていたが、これをより生かし、本企画展の名古屋大学の歴史との関連性を強調するためにも、医学専門部を紹介する展示パネルを新規に作成した。¹⁸⁾

この結果、軍医関係の展示資料が大変多くなった。これらを一つのコーナーにまとめると、そこだけが他のコーナーに比べて突出して大きくなってしまい、バランスを欠くと考えた。そこで軍医関係資料を、「近代日本の軍医とその養成」と「戦場と軍医」という二つのコーナーに分けることにした。これに「戦時下の大学と科学」、「銃後

の諸相と結末」を加え、四コーナー構成となった。「戦争と大学」二〇一四と異なり、各コーナーにあえて数字は付けなかった。もちろんコーナー内の順路は考えて構成したが、本企画展の場合、コーナーごとについては、どの順番で観覧しても問題はないからである。

鶴舞のミニ企画展で展示された資料については、原則として東山でも展示する方針をとった。ただし、数はごく少ないが、四つのコーナーのいずれにも分類することが難しい資料については、東山では展示しなかった。また、鶴舞のミニ企画展では展示されなかった附属図書館医学部分館の所蔵資料を、東山での展示にあたって何点か追加した。これは、鶴舞のミニ企画展では「銃後の諸相と結末」に分類できる資料がやや少なかったためである。

なお、本企画展の展示物で、「戦争と大学」二〇一四でも展示した資料は、パネル二枚、展示資料二点のみである。「近代日本と軍医とその養成」コーナーでは、帝国大学等を卒業して近代日本の軍医制度の中心を担った人物たちの著作物や、医科大学等を卒業した者が軍医士官になるために学ぶ陸海軍の軍医学校に関する資料、そして名古屋帝国大学（臨時）附属医学専門部に關する資料等を展示し、大学と密接な関わりを持つ近代日本の軍医制度の概要を示した。このコーナーでは、展示品のほとんどが附属図書館医学部分館の所蔵資料で、それを大学文書資料室作成のパネルで補う形になっている。

「戦場と軍医」コーナーでは、戦場で活動する軍医の状況を示す資料を中心に展示した。ここでは、前述の長谷川重一資料と森岡家文書から選んだ資料が三分の二以上を占めている。本企画展は、全体的に展示資料に図書や冊子の類が多く、単調な印象が否めない部分もあったが、このコーナーは附属図書館医学部分館の資料を含めて物品、葉書、証書といったものが多く、視覚的には最も充実していた。そのため、コーナーを会場の中央に配置し、大型の展示ケースを三つ並べて、それを観覧者が周回するような順路を設定した。

「戦時下の大学と科学」コーナーは、これも「銃後」の一つの側面と言えるが、大学に直接関わる資料をここに集めた。「戦争と大学」二〇一四でも、戦争と科学の問題は大きく取り上げたが、範囲を名古屋大学以外に広げても外すことのできないテーマであった。ここは、パネル以外の展示物は全て附属図書館医学部分館の所蔵資料である。

「銃後の諸相と結末」コーナーは、空襲への対応や被害、航空機を中心とする軍需工場とそこへの国民の動員、など「銃後」の様々なあり方を示す資料を集めた。「戦争と大学」というメインテーマに即した内容ではないが、「銃後」を大学からの視点のみで描くのは難しいので、こうしたコーナーも必要であった。これも、全て附属図書館医学部分館の所蔵資料から構成されている。

展示物一覧の最後の「関連事項年表」（本展示記録にも年表をそのまま掲載した）は、その元となつたのは鶴舞のミニ企画展で展示されていた年表である。本企画展は、「戦争と大学」二〇一四に比べて、展示物の年代範囲がかなり広いので、展示資料の年代分布を記した年表を作成することの意義は大きい。東山ではこれを拡大してパネル化することにした。しかし拡大すると、東山で展示するにあたって新しく追加した展示資料を書き加える必要もあつて、パネルが大きくなりすぎてしまうので、掲載事項をかなりしぼりこんだ。

むすびにかえて

企画展「戦争と大学 ふたたび―軍医と銃後―」に対する報道機関の反応は、総じていえば二〇一四年の企画展

「戦争と大学」には及ばなかった。鶴舞での企画展については、本稿第一章で述べられているように、新聞等にくつかの記事が載ったが、東山の企画展については報道機関に取り上げられることはなかった。企画展の観覧者数は、鶴舞の方は不明だが、東山の方は四〇六名と、会期の長さは同じ一ヵ月にもかかわらず、二〇一四年の半分に満たなかった。

前回の二〇一四年は、戦後七〇周年の前年であり、第二次世界大戦やアジア太平洋戦争に対する報道機関の関心がとりわけ高かった。今回は戦後七〇周年の翌年であり、ある意味やむを得ない部分はある。ただ、東山での展示については、本稿第二章でも述べたように展示構成を確定した時期がかなり遅かったため、学外への事前の宣伝がほとんどできず、その点は反省しなければならない。

しかし、今回の企画展が、軍医というこれまであまり注目されて来なかったテーマを通じて、本学の歴史と関わらせる形で、しかも他大学との連携の下に、学内・学外の人々に戦争について考える機会を提供したことの意義は大きい。また、特別講演会をきっかけに、関係者の貴重な聴き取りを行うことができたことも、大きな成果であったといえる。

Nagoya University Medical Museum
Small Exhibit 13th

ミニ企画展

戦争と大学

— 軍医と銃後 —

ふたたび



2016 6. 10 FRI - 9. 30 FRI

平日 9:00-20:00 8月8日-9月30日は9:00-17:00

土 13:00-17:00 8月13日-9月24日の土曜日は休館

休館日: 日・祝日、8月15-16日、25-31日

入場無料

名古屋大学附属図書館医学部分館 2階入口ホール

問合せ先: 名古屋大学附属図書館医学部分館

名古屋市昭和区鶴舞町65

TEL 052-744-2505

特別講演会 大川 四郎 (愛知大学法学部教授)

2016年9月30日(金) 15:00-16:30 (名古屋大学医学部基礎研究棟 1階 会議室2)

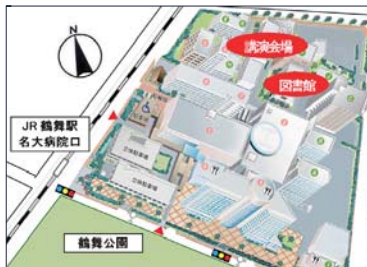
「第二次世界大戦中の赤十字と名古屋大学」

日本の軍医制度は明治初期に始まりました。司馬凌海(1840-1879)の師であった松本良順(1832-1907)と、森林太郎(1862-1922)は軍医としても知られ、二人は後に軍医総監になりました。

1931年(昭和6年)の満州事変、1937年の日中戦争と戦争が拡大していくにつれて、軍医として召集される医師が増えて、医師不足が顕著となります。陸軍省などの要請により、医師の増員養成が国防上、国民医療上急務とされ、1939年5月に、帝国大学7校、官立医科大学6校に修業年限を4年とする臨時附属医学専門部が設置されました。同年、満蒙国境で大日本帝国とソビエト連邦両軍が衝突するノモンハン事件が起こり、国内では、国家総動員法に基づく国民徴用令が制定され、銃後(直接戦闘に加わっていない一般国民)も、間接的に何らかの形で戦争に参加していくことになります。

このミニ企画展は2014年2月から6月にかけて開催した「戦争と大学—1931～1945 官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学—」の続編として開催するもので、名古屋大学医学部史料室(附属図書館医学部分館4階)に所蔵する史料の中から、軍医と銃後に関連する図書、写真、医療器具などにより、展示公開します。

企画展期間中に、特別講演会も開催します。



特別講演会

入場無料
予約不要



第二次世界大戦中の赤十字と名古屋大学

日時: 2016年9月30日(金) 15:00-16:30

会場: 名古屋大学医学部基礎研究棟 1階 会議室2

大川 四郎(愛知大学法学部教授)

名古屋大学法学部卒業

法学修士(ジュネーブ州立大学法学部)、法学修士(名古屋大学)

講演テーマに関する著作類:

- ・共著「太平洋戦争中の日本国内における欧米人捕虜の処遇に関する日本赤十字社文書の研究」
- ・単著「赤十字国際委員会駐日首席代表フリッツ・パラヴィチーニ博士(1874-1944)とそのスイス人協力者たち」(ロジャー・モッティエニ編『スイスと日本 — 課題を抱えた時代のパートナーシップ(スイス日本商工会議所創立25周年記念年鑑)』)
- ・単著「(研究ノート)第1次世界大戦中の名古屋俘虜収容所における救恤活動について — 赤十字国際委員会駐日代表フリッツ・パラヴィチーニ報告をもとにして」
- ・編訳書『欧米人捕虜と赤十字活動 — パラヴィチーニ博士の復権』(論創社、2005年)ほか



近代医学の黎明デジタルアーカイブ

<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/history/>

名古屋大学医学部史料室に所蔵している史料をデジタル化し、「近代医学の黎明デジタルアーカイブ」として、インターネットで公開しています。ぜひご覧ください。



資料ご寄贈のお願い

みなさまがお持ちの医学・医療史に関連する資料がありましたら、ぜひご寄贈いただけますよう、お願いいたします。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11442216


いけ だけんさい ふじ たつ あきら しきゅう びょうろん
池田謙斎著・藤田嗣章訳『子宮病論』 1878年

池田謙斎(1841-1918)は、ベルリン大学医学部に学び、帰国後、陸軍軍医監(少将相当)などを務め、東京帝国大学医学部初代総理となりました。

藤田嗣章(1854-1941)は、大学東校(東大医学部の前身)で学び、陸軍軍医補、台湾陸軍軍医部長、朝鮮総督府医院長などを経て、1912年(大正元年)軍医総監(中将相当)となりました。画家

ふじ たつ ちはる
藤田嗣治(1886-1968)の父です。

本書は、「医事新聞」第4号(明治11年8月29日)からの抜書です。



1冊：縦 12x 横 17cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 10003424


かたやまくに か いしごうただのり ぐんじん げ かしゅじゅつ
エスマルク著：片山国嘉訳：石黒忠恵補訂『軍陣外科手術』 1881年

エスマルク(エスマルヒ Friedrich von Esmarch 1823-1908)は、ドイツのキール大学外科部長で、ドイツ陸軍軍医監です。エスマルヒ バンデージという駆血帯や、エスマルヒ開口器に名前が残っています。

片山国嘉(1855-1931)は、遠江国周智郡(現 静岡県浜松市)の出身で、1879年(明治12年)東京大学医学部を卒業しました。ドイツ留学後、1888年帝国大学医科大学教授となり、裁判医学講座(後に法医学講座)を開講し、法医学という言葉を知りました。

石黒忠恵(1845-1941)は、陸奥国伊達郡(現 福島県伊達市)出身で、1865年(慶応元年)医学所に入り、西洋医学を修めました。1869年に大学東校(東大医学部の前身)に勤務し、1871年に兵部省(1872年に廃止後、陸軍省と海軍省が新設)の軍医となりました。1877年の西南戦争では大阪臨時陸軍病院長を務め、愛知県公立病院にいた後藤新平(1857-1929)の申し出により、外科治療を指導し、内務省衛生局入りを勧めました。

軍陣外科手術とは、軍隊を対象とした外科手術で、本書は、繃帯篇と手術篇(格魯魯保兒母麻酔法、止血法、刺絡、輸血、四肢の切離、関節の切除など)の2篇から構成されています。




418p 図版：
縦 25cm × 横 17cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 10009456

いしごうただのり もりりん たろう りくぐんえいせいきょうてい
石黒忠恵序文 森林太郎撰『陸軍衛生教程』 1889年

石黒忠恵(1845-1941)は、陸奥国伊達郡(現 福島県伊達市)出身で、1865年(慶応元年)医学所に入り、西洋医学を修めました。1869年に大学東校(東大医学部の前身)に勤務し、1871年に兵部省(1872年に廃止後、陸軍省と海軍省が新設)の軍医となりました。1877年の西南戦争では大阪臨時陸軍病院長を務め、愛知県公立病院にいた後藤新平(1857-1929)の申し出により、外科治療を指導し、内務省衛生局入りを勧めました。

陸軍軍医学校長 陸軍軍医監となった石黒が書いた序文では、従来の衛生書は原書を翻訳し編集したものだが、ドイツで衛生学と軍陣衛生学を学んだ陸軍一等軍医 森林太郎(鳴外 1862-1922)による本書は、真の著作物であり本校で刊行した、と述べています。



3, 208p：
縦 21cm
× 横 15cm

もりりん たろう こいけ まさなお せいせいしんべん
森林太郎 小池正直『衛生新篇』 1897年

942p :
縦 23cm
× 横 17cm

森林太郎(鴎外 1862-1922)は、石見国津和野(現 島根県津和野町)出身です。1881年(明治14年)に東京大学医学部を卒業後、陸軍省軍医、1884年～1888年のドイツ留学などを経て、1907年に陸軍軍医総監・陸軍省医務局長となりました。公務のかたわら、多彩な文学活動を展開しました。

小池正直(1854-1914)は、出羽国鶴岡(現 山形県鶴岡市)出身です。祖父は鶴岡で初めて種痘を行い、藩医となりました。1881年に東京大学医学部を卒業後、開業、陸軍軍医副、陸軍軍医学校教官、1888年～1889年のドイツ留学などを経て、1905年、陸軍軍医総監となりました。

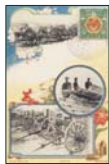
森と小池は、ともにドイツで衛生学を学んでいます。

もりりん たろう せいせいいがくたいい
森林太郎講述『衛生學大意』 1907年

2, 4, 160p,
図版[1]枚 :
縦 23cm
× 横 15cm

森林太郎(鴎外 1862-1922)は、石見国津和野(現 島根県津和野町)出身です。津和野藩代々の御典医(大名に仕えた医師)の家柄で、7歳より藩校で漢学を学び、10歳で上京し、進文学舎でドイツ語を学びました。1881年(明治14年)7月に東京大学医学部を卒業後は、開業医の父を手伝い、同年12月に陸軍省に入り軍医となりました。ドイツ留学後は、陸軍軍医学舎教官、日清戦争出征、第二軍軍医部長として日露戦争出征などの後、1907年に陸軍軍医総監・陸軍省医務局長となりました。公務のかたわら、1890年に『舞姫』を発表し、以後、創作、翻訳などの多彩な文学活動を展開しました。

本書は、森林太郎の講話を筆録したもので、土地、下水、埋葬、上水、都会、家屋、空気、気象、衣服、栄養の10章に編集されています。

りったいしれいきわんえはがき
立太子礼記念絵葉書 1916年

総はがき1枚: カラー:
縦14cm×横10cm

迪宮 裕仁親王(昭和天皇 1901-1989)は、1916年(大正5年)11月3日[かしごころ あまてらすおおみかみ みたましろ]に宮中賢所[天照大神の御霊代とする神鏡をまつてある所]で立太子礼を行い、満15歳で正式に皇太子となりました。この絵葉書は、通信省が発行し、立太子礼記念切手(おしどり 1銭5厘)が貼られていて、名古屋[大正]5. 11. 3の記念スタンプが押印されています。

1927年(昭和2年)、愛知県で実施された陸軍特別大演習にともない、昭和天皇による行幸がありました。11月14日午前9時5分に自動車で県庁を訪問したのち、9時55分に鶴舞の愛知医科大学(医学部の前身)、名古屋高等工業学校(名古屋工業大学の前身)、11時6分に旧制第八高等学校(教養部の前身)、11時39分には名古屋高等商業学校(経済学部の前身)を訪問しました。

あきもとぶんご こうえいろうく
秋本文吾謹纂『光榮録』 1928年



1冊：縦 28cm ×
横 39cm

1927年(昭和2年)11月、愛知県で実施された陸軍特別大演習にと
もない、昭和天皇(1901-1989)による行幸がありました。

11月14日、当時26歳の昭和天皇は、午前9時5分に自動車で県庁を
訪問したのち、9時55分に鶴舞の愛知医科大学(名大医学部の前身)、
名古屋高等工業学校(名古屋工業大学の前身)、11時6分に第8高等
学校(現 名古屋市立大学滝子キャンパス)、11時39分には名古屋高
等商業学校(経済学部の前身、現 名市大桜山キャンパス)を訪問し、
いずれも主な職員と会ったのち展示物を観覧し、八高と名高商で
は運動場で学生一同を親閲しました。

いしごろだいすけ せんじえいせいきんむけんきやうく
石黒大介『戦時衛生勤務研究録』 1930年



4, 210p :
縦 23cm × 横 16cm

石黒大介は、1936年(昭和11年)8月に軍医の最高位である軍医總監と
なり、関東軍軍医部長を務めました。

本書は、戦地の衛生勤務についての解説書で、戦傷病の史的考察、行
軍に関する衛生勤務、衛生隊、野戦病院、軍兵站衛生勤務、特殊部隊衛生
勤務、国際法規などと、戦時出征軍衛生基幹業務系統、傷病者後送概況、
野戦病院開設要図などの附図から構成されています。野戦病院では、発
著部により傷者の心理に配慮して、甲(直ちに手術室に送るべきもの)、
乙(重症であるが直ちに処置を必要としないもの)、丙(その他の傷者)、
丁(平病)と患者を選定し、先ず病室に収容する、と書かれています。

まんしやうていこくぐんいだん ぐんいだんざっし
満洲帝国軍医団『軍医団雑誌』 1935年創刊



1号～57号:
縦 25cm
× 横 19cm

満洲帝国軍医団は、1935年(満洲国の元号では康德2年)に『軍医団雑誌』を
創刊しました。創刊号には、清朝最後の皇帝で、後の満洲国皇帝 愛新覺羅
溥儀(1906-1967)、軍政部大臣 張景恵(1871-1959)、日本帝国陸軍軍医団長
小泉親彦(1884-1945)ら10数名の写真が掲載されています。

1942年の第46号には、関東軍の牧軍医中佐の講演記事「細菌戦に就て」が
掲載されています。日本軍の細菌戦では、ペスト菌、コレラ菌、チフス菌、炭疽
菌などが考えられていました。「眼で見ることが出来ませんからして、或程度
人に気附かずに、思い切って使うことができます」(講演記事より)

さんぎょうじゆうぎょういん さいようじしんたいけんさほう ていきけんこうしんだんほう
 『産業従業員の採用時身体検査法・定期健康診断法』 1937年



2, 2, 106, 104, 10p : 図
 版 : 縦 19cm × 横 13cm

日本産業衛生協会の産業医学叢書の第一冊として発行された本書には、附録「身体検査規程類集」として、1923年(大正12年)に設置された兵器、軍需品、火薬類などを製造した陸軍造兵廠と、海軍職工及鉱夫志願者、南満州鉄道株式会社などの身体検査規則が掲載されています。

陸軍造兵廠身体検査規程では、成年男子(満20歳以上)は、身長154cm、胸囲78cm、体重50kg未満、成年女子(満18歳以上)は、身長143cm、胸囲73cm、体重45kg未満は不合格としています。

せんちだちよ めいだいがくぶがうかいほう めいていだいいがくぶがくゆうかいほう めいだいいがくぶがくゆうかいほう
 「戦地便り」 名大校友会報～名帝大醫學部學友會報～名大醫學部學友會報 1937年～1940年



「本学関係者にして既に征戦の途に上られた方二百に垂んとしています。荒漠たる北支の朔風[北風]に夢みるは故国の姿、対敵百米の上海の夜に胸を去来するは母校の師友。今ここにそれら勇士の方々の生々しい便りを集める事が出来たのを吾々は誇りとします。猶、軍事的理由から一部割愛若くは伏字とするの止むなきに至りました…」(名大校友会報 第25号 昭和12年10月31日発行 より)

戦局の激化とともに、学友会報は第60号(1940年9月30日)で休刊となり、「戦地便り」も第60号が最後となりました。

学友会報が再発行されたのは、6年後、戦後の1946年です。

ふじたたちかじ せんじょうえにつき ふじたぐんいししょうさいこう
 藤田近二『戦場絵日記：藤田軍医少佐遺稿』 1939年



9, 271, 16p
 : 縦 23cm ×
 横 16cm

藤田近二(1895-1939)は、福島県出身です。新潟医学専門学校を卒業後、陸軍軍医としてシベリア出征などに従軍し、1923年、関東大震災時には、傷病者の救護にあたりました。予備役編入、病院勤務、開業を経て、1937年(昭和12年)8月応召、山川部隊に属し輸送指揮官として出征し、上海、杭州など各地を転戦しました。1939年2月、九江兵站病院(江西省北部の兵站地に開設された病院)で戦病死し、この日をもって陸軍軍医少佐に任ぜられました。

絵が趣味で、「絵日記大尉」、「彩官大尉」として新聞等で報道されました。戦地で妻の病死を1か月後に知り、「悲壮なるものよ…しかし自分は、現在戦争をしている軍人だ。自分の任務は重い。身体の続く限り精神のありたけを盡さねばならない」と漢江攻略出発前夜に書いています。表紙には、「憲兵司令部 検閲済 14. 8. 22」の検閲印があります。

名古屋帝国大学臨時附属醫學專門部『入學生徒寫真』 1939年～1944年

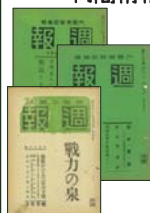


6枚：
縦 38～46cm
× 横 30～32cm

1931年(昭和6年)の満州事変、1937年の日中戦争と戦争が拡大していくにつれて、軍医として召集される医師が増えて、医師不足が顕著となります。陸軍省などの要請により、医師の増員養成が国防上、国民医療上急務とされ、1939年5月に、帝国大学7校、国立医科大学6校(新潟、岡山、千葉、金沢、長崎、熊本)に修業年限を4年(1947年時点の在学学生は5年)とする臨時附属医学専門部が設置されました。入学資格は、旧制中学校卒業者並に同等以上の資格の者でした。さらに1943年以降には、女子医専など、各地に医学専門学校が設置されました。

名古屋帝国大学臨時附属医学専門部には、1939年に78名が入学しますが、1941年の太平洋戦争の開戦により、繰り上げで半年早い1942年9月に卒業し、10月にはそれぞれ軍務に就きました。1946年度に新入生の募集を停止しました。

内閣情報部・情報局編輯『週報』102、120、389号 1939～1945年



3冊：縦 21-22cm
× 横 15cm

週報は、官報附録として1936年(昭和11年)10月に政府が創刊した週刊の広報誌です。各省の情報宣伝や世論指導の連絡調整にあたった情報委員会が編集を担当しました。情報委員会は、1937年に内閣情報部(50号-)、1940年には情報局(218号-)へと変わり、戦争に向けた世論形成、思想取締の強化が目的となっていきました。

週報は当初、法令・法案、各種政策の解説、内外情勢などの資料を掲載していましたが、102号(1939年)には、銃後後援の実情、傷兵の医療保護と職業補導、120号(1939年)には、戦争医学、西南支那の抗日新ルート、389号(1944年)は紙質が悪くなり、巻頭には「敵米英の圧迫が加わるに従って、一億生命のこの衝動力は鬱勃として漲り…」という論説が掲載されています。

軍医携帯囊の衛生材料 1940年代前半



軍医 大村明(1911-1990?)が携帯していた衛生材料です。

大村明は、福岡県出身で、1938年に名古屋医科大学を卒業後、勝沼精蔵(1886-1963)の内科学教室の副手、陸軍軍医候補生となり、後に、満州の掖河陸軍病院に勤務しました。

軍医携帯囊には、野外で救急処置を施すのに必要な衛生材料が入っています。消毒用アルコール入れ、薬剤(ヨード丁幾、^{チンキ} 硼酸錠、^{あへんじよう} 阿片錠、^{しょうこうじよう} 昇汞錠(塩化水銀 消毒液用)など)、滅菌ガーゼ包、耳鏡などです。ホウ酸錠と滅菌ガーゼ包には、「陸軍衛生材料廠」と書かれています。



せくずえいいち せんじえいせいようむ ぐんじんげかのぶ
瀬屑英一『戦時衛生要務：軍陣外科／部』 1941年

瀬屑英一(1895-1954)は、1917年(大正6年)海軍軍医学生となり、1921年6月東京帝国大学医学部を卒業しました。海軍軍医中尉として、二等巡洋艦 大井、一等駆逐艦 浦風の乗組軍医などを経て、1936年に軍医学校教官(海軍軍医大佐)、1944年(昭和19年)に海軍軍医少将となっています。

48p : 21cm

本書は、海軍軍医科士官が主として艦船において戦闘時にとるべき準備、処置ならびに戦闘後の配慮等に関する事で、主として日露戦役海軍衛生史および第一次世界大戦の文献を調査した結果をもとにしています。各章は、応急(傷者処置)戦技、医務科臨戦準備、艦内傷者運搬と傷者移乗、陸戦隊揚陸、溺者救助、海戦戦傷、戦闘作業創、航空災害と航空戦傷からなります。表紙には秘密度が高い**秘**とあります。



じょうほうきよく しやしんしゅうほう
情報局編輯『寫眞週報』 227、268号) 1942～1943年

写真週報は、1937年(昭和12年)、情報委員会を拡大・改組し、内閣総理大臣のもとに発足した内閣情報部により、1938年に創刊された週刊の国策グラフ雑誌です。内閣情報部は、1940年に外務省情報部、陸軍省情報部、海軍省軍事普及部、内務省警保局検閲課など各省に分かれていた情報事務を統一化することを目指して設置された情報局へと代わりました。

268号(1943年)には、「機械工を志す女性のために」東京と名古屋に設けられた女子機械工補導所の内、名古屋鶴舞女子機械工補導所(千種区花田町3-15)が紹介されています。「着物も化粧もそして甘い夢も投げすてて挺身参加するうら若い女性の数も一日と激増してきた」(本文より)とあり、銃後の窮乏生活から目をそらして、団結を高める記事が掲載されました。

2冊 :
 縦 30cm×横 21cm



みよしますき ないとうそうぞう ほんじょうまさお せんじ かしょうしやくきゅうきゅうほう
三好益来、内藤桑三、本城正夫『戦時下傷者救急法』 1943年

戦時下の傷者は、平時損傷に加えて空襲による戦傷の発生もあり、新しい救急法が必要とされたことに応じて書かれたのが本書です。

創の処置、包帯術、出血の処置、人工呼吸法、骨傷の救急法、傷者の取扱と運搬などから構成され、真柄衛生少尉が考案した簡易繃帶法、財津衛生曹長の挿図が掲載されています。

本書執筆時に、三好益来は陸軍軍医大佐であり、昭和18年に「現地において治療せる骨戦傷について」により東京帝国大学から医学博士号を授与されました。また、内藤桑三は陸軍軍医少佐、本城正夫は陸軍衛生中尉でした。

2, 5, 185p :
 縦 19cm×横 13cm

三菱重工株式会社名古屋航空機製作所『兵器を造る我等の覚悟』 1943年



25p :
縦19cm×横13cm

内閣総理大臣兼陸軍大臣 東條英機(1884-1948)による1943年(昭和18年)8月4日の訓示、名古屋航空機製作所長 岡野保次郎(1891-1976)による「兵器を造る我等の覚悟」(1943年5月28日 東京放送局より放送)、大本营陸軍報道部長 谷萩那華雄(1895-1949)による「航空決戦」(1943年5月1日講演)ほか全12編の放送・講演集です。

「大東亜戦争勃発以来僅々1年有余の間陸海軍御当局より或は性能優秀の廉により或は増産達成の廉により栄の表彰を拝受すること実に5回に及んだ…本書はこの類例なき光栄と感激を記念し…一層我等の責務の重大性に対する自覚を固め…出版したもの」(岡野保次郎の序より)

『佳木斯医科大学新聞』第2号(第1回生卒業記念号) 1943年



4p :
縦55cm×横40cm

満州国立佳木斯医科大学は、1940年(昭和15年)に設立されました。4年制で、養成人員は各年150名、入学資格は日本の旧制中学校4年修了(16歳)程度です。開拓地医師の養成が目的で、第1学年には内地での募集とともに、満州開拓青年義勇隊訓練生から80名が選抜されました。

初代学長は、航空医学を研究し、日本初の衛生飛行機(患者輸送機)を完成させた元陸軍軍医学校校長の寺師義信(1882-1964)であり、教務主事は、生理学者で京都帝国大学教授の正路倫之助(1886-1962)でした。

技術院『戦時研究員制度二就テ』 1944年



27p :
縦18cm×横13cm

技術院は内閣総理大臣の管理下、科学技術の刷新向上、就中航空に関する科学技術の躍進を図ることを目的として1942年(昭和17年)に設置されました。

1943年10月に、技術院の主導により内閣が設けたのが、戦時研究員制度です。戦時研究員は、戦争目的の達成のため、国が全力をかたむけて急速に成果をあげる必要のある科学技術の重要課題に取り組む、とされました。首相を会長とする研究動員会議が決定する戦時研究員は、1944年には1,122人にのぼりました。同年の研究課題は183で、その7割の担当官庁が陸軍省と海軍省でした。技術院は1945年9月4日に廃止されました。

『名古屋帝国大学医学部アルバム』 1944年



1冊：
縦38×横28cm

1886年(明治19年)に公布された帝国大学令による7番目の帝国大学として、1939年4月1日に名古屋帝国大学は設立されました。創設当初は、医学部と理工学部の2学部のみでしたが、1942年には理工学部を理学部と工学部に分離しました。

1925年、「陸軍現役将校学校配属令」の公布により、中等学校以上の学校に現役将校が配属され、軍事教練が開始されました。「この制度は、学生に対する思想対策の施策であるとともに、戦時における予備役将校の確保と、軍縮によって余剰となった将校の温存とを目的として」『日本大百科全書』による]いました。

陸軍軍医学校編『軍隊臨床検査法教程：昭和19年制定』 1944年



2, 4, 358p :
縦21cm
×横15cm

陸軍軍医学校は、東京都牛込区(現 新宿区)戸山町にあった旧帝国陸軍の医学系の教育機関のひとつです。医科大学や医学専門学校を卒業後、軍医見習士官を経て、陸軍軍医学校の乙種学生(原則1年)となり、入校と同時に大卒者は陸軍軍医中尉、医専卒者は陸軍軍医少尉となります。石黒忠恵(1845

-1941)、森林太郎(鳴外 1862-1922)らが校長を務めました。

本書は、陸軍軍医学校の乙種学生に対する軍陣内科学実習教育において、なるべく野戦で実施可能な病理検査法を選定し、軍陣内科学教室の教官が分担執筆したものです。尿、糞便、血液、脳脊髄液、腹部内臓機能、自律神経機能、ビタミンの各検査と、結核に関する諸検査法から構成されています。

厚生省『職業能力申告手帳』 1944年



10p :
縦15cm×横11cm

1937年(昭和12年)に日中戦争が起ると、第1次近衛内閣は戦争協力体制をつくるために、国民精神総動員運動を起しました。翌年、国が人や物をなんでも統制・運用する権限を持つ「国家総動員法」が成立し、この規定に基づき1939年に「国民職業能力申告令」が出されました。国が必要な時に動員できるようにするため、氏名、生年月日、本籍、居住地、兵役関係、学歴、職業名、就業場所などを記載した「職業能力申告手帳」が交付されました。

当初、申告すべき者は、16歳から50歳未満の男子国民で、厚生大臣の指定する職業の従事者、指定する大学、専門学校、実業学校などで指定する学科を履修し卒業した者などでしたが、1941年の「国民労務手帳法」では、14歳から60歳未満、命令により定めた技術者、労務者へと拡大しました。

グロウ、アームストロング共著 ^{はたなかやすお まざわひろお こうくういがくかいせつ} 島中雄 間澤久雄共譯『航空醫學解説』 1944年



2, 4, 188p :
縦 19cm
×横 14cm

グロウ (Malcolm Cummings Grow 1887-1960) は米国空軍の最初の軍医総監です。アームストロング (Harry George Armstrong 1899-1983) は米国空軍少将、医師で、航空医学のパイオニアとして知られています。

本書は、“Fit to fly : a medical handbook for fliers”(1941年)の抄訳です。「戦局の推移につれ、航空兵力の強化は日増しに重要性を加えつつある。(中略) 航空兵力を量において、また質において、しかも可及的迅速に充実することは、時局下、国民全般に課せられた最重要課題である。この課題の遂行こそ、正しく聖戦成敗[成功か失敗か]の岐路をなすとも云い得られる。」(東京帝国大学航空研究所の淡路圓次郎の序文より)

病院庶務掛 ^{びょういんしよむかり} 『大東亜戦争戦災記念写真』 1945年

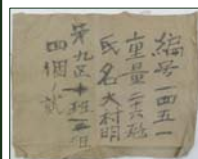


1冊 :
縦 27cm × 横 20cm

2015年(平成27年)5月8日に、医学部の事務室内で資料を整理中に見つかり、医学部史料室に寄贈されました。

(1) 勝沼精蔵(1886-1963)、山元昌之(1904-1994)『^{かづぬませいぞう やまもとまさゆき}秘 病院防空 - 戦跡と戦訓-』(1945年4月3日稿)。(2) 1965年に整理された1945年3月12日、19日、25日の空襲により被災した建物と焼夷弾などの写真。(3) 1959年に集められた南京政府主席の汪兆銘(1883 -1944)が1944年3月に名古屋帝国大学医学部附属病院に極秘入院した後に、死亡を知らせる掲示と主治医団(勝沼精蔵、齋藤真ほか)の写真などが綴られています。

記名布 ^{きめいふ} 1945年



1枚 : 縦 21cm × 横 26cm

1945年(昭和20年)8月9日に始まったソ連の満州への侵攻時に、^{おおむらあきら}軍医 大村明(1911-1990?)が手にしていた荷物の記名布です。

大村明は、福岡県出身で、高知高等学校から1938年に名古屋医科大学を卒業後、勝沼精蔵(1886-1963)の内科学教室の副手、陸軍軍医候補生となり、後に、満州の^{えきば}掖河陸軍病院に勤務しました。

「実験的腫瘍に対するHyaluronidaseの影響と制癌剤作用増強に就いて」により、1957年度に医学博士(旧制)の学位が授与されました。

おぐまもろ おぐまもろ せんじけんきゅう せいぶつがく かがくあさひ
 小熊 捍『戦時研究と生物学』（科学朝日 第5巻第8號） 1945年



20p :
縦 28cm × 横 21cm

小熊捍(1886-1971)は、昆虫学者、遺伝学者です。

札幌農学校、東北帝国大学農科大学を卒業後、北海道帝国大学農学部と理学部の教授、国立遺伝学研究所長などを歴任しました。

この時評では、戦時研究の「課題がほとんど全部戦争の第一線活動に直接関係する諸問題に終始しているのは止むを得ない、また当然のことでもある。しかし銃後もまた戦の第一線となった昨今では、銃後に課題を持つ研究も当然戦時研究として、強力にかつ急速に推進して行かなくてはならない、そしてその銃後課題の筆頭に、作物の急速増産の問題が取り上げられてよいと思う」と述べ、北海道のトウモロコシ、じゃがいもを例に挙げています。

なごやしふっこうと しげいかくず
 名古屋市復興都市計画図 1946年



地図1枚 :
縦 77cm × 横 55cm

名古屋市では市内の4分の1ほどが空襲により被災しました。

戦後1945年9月に、名古屋市は無秩序に建ちだしたバラックの規制を始め、市長を会長とする復興調査会が組織されて、10月に東京帝国大学工学部で土木工学を専攻し、木曽三川の治水なども担当した田淵寿郎(1890-1974)が技監に就任しました。田淵を中心とした戦災復興の基本計画は12月に決定しました。この基本方針に従い、東西(若宮大通)と南北(久屋大通)の2本の100m道路が整備され、市内に約280か所あった基地は市の東部、平和公園に移転させることになりました。田淵は名古屋の「名誉市民第一号」に選ばれています。

LPLコード盤 ぼうきょう うた えきがりくぐんびょういん
 『望郷の歌: 掖河陸軍病院』 1970年以降



1枚 :
縦 32cm × 横 32cm

陸軍病院は、陸軍が部隊所在地などに設けた傷病兵の治療、看護のための病院です。掖河陸軍病院は、満州東部にありました。

1945年(昭和20年)8月9日に始まったソ連の満州への侵攻後も、ソ連軍の管理下で、掖河陸軍病院は司令部、寧安、牡丹江第一陸軍病院の軍医、衛生兵によって病院が開設されていました。

福岡県出身の大村明(1911-1990?)は、1938年に名古屋医科大学を卒業後、勝沼精蔵(1886-1963)の内科学教室の副手、陸軍軍医候補生となり、後に、掖河陸軍病院に勤務しました。「掖河陸軍病院の歌」は戦後、掖河陸軍病院で作詞しました。



582p 図：縦 22cm ×
横 16cm

うみ かいでんぐんいがっこうとつか いっきせんぼつしやついでんろうく
『海ゆかば：海軍軍医学校戸塚一期戦没者追悼録』 1976年

海軍軍医学校は、軍人の医療・衛生を担当する軍医士官、薬剤士官を養成する教育機関で、1889年(明治22年)に創設されました。

戸塚分校は1944年に、新任軍医科士官らの増員に応えるため開校し、同年7月に全国の医科系大学を卒業した医師、歯科医師、薬剤師らが入学しました。翌1945年1月に、軍医科 約850名をはじめとする第一期が卒業し、実戦部隊に配置されましたが、次の在校生は戦争の終結とともに復員したため、第二期のない学校となりました。



2冊：
縦 20cm ×
横 14cm

おおたもとつぐ せんぜんはびょういんちやう かいこうく
太田元次『戦前派病院長の回顧録』正・続 1979年、1992年

太田元次(1913-1990)は、1938年(昭和13年)に名古屋医科大学を卒業後、斎藤外科学教室の副手を経て、同年5月、軍医候補生として入隊、1944年1月、軍医大尉で召集解除後、再び、斎藤外科学教室の副手、同年7月、臨時召集、1945年11月、召集解除となりました。1940年に樹立された南京政府の首席である汪兆銘(1883-1944)が、1944年3月に名古屋帝国大学医学部附属医院に「梅号」として極秘入院した時に専属医となりました。

正編では、汪兆銘との思い出、幼少期から官立名古屋医科大学を経て、南京、応山などでの軍医としての生活、戦後の名古屋掖済会病院の開院まで、続編では、名古屋掖済会病院長、愛知医科大学学長時代が回顧されています。



xi, v, 1381,
121p, 図：
縦 27cm
×横 19cm

はくようかい まんしゅうこくりくぐんぐんいがっこう ごそく ぐんいだん
白楊会編『満洲国陸軍軍医学校：五族の軍医団』 1980年

白楊会は、満洲国陸軍軍医学校同窓会です。

五族とは、日本人、漢人、満洲人、朝鮮人、蒙古人を指し、1932年に日本が満洲国を建国した際には「五族協和」というスローガンが使われました。

満洲国では、軍医の採用は困難をきわめ、哈爾濱南郊の王兆屯(現 中国黒竜江省哈爾濱市香坊区)にあった軍医養成処を国軍に編入し、1935年5月に陸軍軍医学校と改称しました。医学校では、日本人、満洲人、蒙古人らが4年間、起居動作、寝食を共にして、医学と軍事学を修めました。

1945年8月15日、王兆屯の白楊(やまならしの異名)の杜のなかで、校長らは、第11期～13期軍医候補生を前に、陸軍軍医学校の解散を宣告しました。

おののの おおもとつぐぐんい おうちょうめいかんごにっししょう

小野 稔『太田元次軍医の汪兆銘看護日誌抄』 1988年

113p :
縦 22cm ×
横 16cm

太田元次(1913-1990)は、1938年(昭和13年)に名古屋医科大学を卒業後、斎藤外科学教室の副手を経て、同年5月、軍医候補生として入隊、1944年1月、軍医大尉で召集解除後、再び、斎藤外科学教室の副手、同年7月、臨時召集、1945年11月、召集解除となりました。

汪兆銘(1883-1944)は、広東省出身の政治家です。1940年3月、日本の傀儡政権の南京政府を樹立し、主席に就任しました。1944年3月に名古屋帝国大学医学部附属医院に「梅号」として極秘入院し、太田元次が専属医となりました。以前狙撃の際に受けた傷の再手術を受けますが、汪兆銘は多発性骨髄腫であったため、治療の甲斐もなく同年11月に附属医院内で亡くなりました。

へきそ こんさん かいはつ はたふ いながきぐん いしょうさ いっこうせい いくとどういん
『碧素：国産ペニシリン開発の旗振り稲垣軍医少佐と一高生学徒動員』 2005年vi, 341p :
縦 22cm × 横 26cm

1943年(昭和18年)12月、ドイツから来た潜水艦リボートの艦内に医学雑誌“Klinische Wochenschrift”[臨床週報]がありました。そこに掲載されていたベルリン大学薬理学教授 Manfred Kiese(1910-1983)によるペニシリンの記事を読んだ陸軍軍医学校研究部の軍医少佐 稲垣克彦(1911-2004)は、1944年2月にペニシリン委員会を結成し、同年11月、国産ペニシリン「碧素」(敵性語を避け、一高生により命名)が完成しました。碧素は、1945年3月10日の東京大空襲の際に使用され驚異的な効果を発揮しますが、物資の不足、空襲などで工場での大量生産はできず、終戦を迎えました。

い かくせい じだい どうきょうだい いくい いくぶそつぎょう にほんきんたい いくく あゆ
『医学生とその時代：東京大学医学部卒業アルバムにみる日本近代医学の歩み』 2008年

vii, 449p : 挿図 : 縦 31cm × 横 22cm

1858年(安政5年)、伊東玄朴(1801-1871)ら江戸市中の蘭方医82名の醸金により設立された神田お玉が池種痘所が東京大学医学部の源流です。本書は、東京大学医学部・医学部附属病院創立150周年記念として編纂された写真集です。

1927年(昭和2年)に施行された「兵役法」は、大学生は27歳まで徴兵延期と定めていました。

しかし、1931年の満州事変以降、兵士の不足が問題となり、1939年の改正では26歳までとし、1941年10月以降は修業年限短縮による繰り上げ卒業、1943年10月、東条英機内閣は学生の徴兵猶予を全面的に取り消す勅令を公布し、すでに軍事教練を課せられていた学生の学徒出陣が行われ、20数万人と言われる『日本大百科全書』による「学徒兵が戦地へ送られました。

終戦71年 戦争展さまざまに

15日は1回目となる終戦記念日。この夏、県内各地では様々な工夫を凝らした企画展が開かれる。恒久平和を願いながら携わる人たちの思いを聞いた。

名古屋大学図書館 医学部分館



展示物を前にたたずむ浦生英博さん＝名古屋市昭和区

軍医資料 主観交えず示す

名古屋大学付属図書館医学部分館(名古屋市昭和区)では、企画展「戦争と大学―軍医と銃後―」が開かれている。軍医でもあった森岡外(森林太郎)の講話録や、国民動員のために交付した職業能力申告手帳、軍医が携帯していた衛生用具など所蔵する資料36点を展示している。

「戦争について振り返り、考える場を提供したい」。企画した同大図書館職員の前生英博さん(62)は狙いを話す。安保法制や憲法9条の改正議論などから戦争を身近に感じる機会が増え、危機感を募らせたのがきっかけだ。多くの人が見られるように、図書館の玄関そばの入

館手続きのいない場所に展示した。展示の解説には主観を交えず、事実としての資料を示すことにこだわった。1935年に満州帝国軍医団が創刊した「軍医団雑誌」の展示には、当時の関東軍医による細菌戦に関する記事の抜粋が添えられている。「目で見ることが出来ませんからして(中略)思い切って使うことができません」。しかし、前生さんの説明書きには、善悪など価値観を示す言葉はない。戦争に関しても様々な見方をする人がいる以上、思想の押しつけはふさわしくない

と考えるからだ。44年の卒業アルバムには、軍事教練で銃を構える2人の医学生が写る。人命を救う医師の卵が人を殺す訓練もしていた。すぐに軍医になることが求められたため、卒業後に大学に残って研究ができる学生はほとんどいなかったという。「最前線に思っても、当時は正面切った言葉なかった。平和なら自分のやりたい道を進める」と前生さんは言う。9月30日まで、土日祝日と16日、25日、31日は無料。問い合わせは052・744・2205(神野勇)へ。



鶴舞での企画展の様子

中日ショッパー 2016年6月16日 vol.756

今週のイチオシ

歴史は未来への教訓

ミニ企画展「戦争と大学」

名古屋大学附属図書館医学部分館では現在、ミニ企画展「戦争と大学 ふたたび 一軍医と銃後」を開催中。好評だった前回に続いて今回も、森林太郎（鷗外）撰「陸軍衛生教程」をはじめ、図書・写真・医療器具などの貴重な所蔵資料を多数展示し、どのようにして国民が戦争に巻き込まれていったのかを振り返ります。無料。最終日には講演会も予定。

今週のイチオシ

歴史は未来への教訓

ミニ企画展「戦争と大学」

名古屋大学附属図書館医学部分館では現在、ミニ企画展「戦争と大学 ふたたび 一軍医と銃後」を開催中。好評だった前回に続いて今回も、森林太郎（鷗外）撰「陸軍衛生教程」をはじめ、図書・写真・医療器具などの貴重な所蔵資料を多数展示し、どのようにして国民が戦争に巻き込まれていったのかを振り返ります。無料。最終日には講演会も予定。

汪兆銘（汪精衛）の死亡を伝える掲示

期間／9月30日（金）まで 場所／名古屋大学附属図書館医学部分館（昭和区鶴舞705）
 時間／午前9時～午後8時（8月8日（月）以降は午後5時まで）、土曜は午後1時～5時
 休館日／日祝、8月15日（月）、16日（火）、25日（木）～31日（水）、8月13日～9月24日の土曜
 問い合わせ／同館（電話052・744・2505）

主催：名古屋大学 附属図書館医学部分館 / 大学文書資料室

企画展

戦争と大学

ふたたび

— 軍医と銃後 —



2016 11. 25 FRI - 12. 26 MON
9:00-21:00

名古屋大学中央図書館 2階 ビブリオサロン

(東山キャンパス、地下鉄「名古屋大学駅」下車、中央図書館入館ゲート手前)

近代の日本が戦争を遂行するにあたり、戦場で活動する軍医は不可欠な存在でした。とくに1937年に日中戦争が始まると、軍などから大量かつ急速な育成が求められるようになります。同時に、国内で戦争を支える「銃後」の体制づくりが叫ばれました。本学を含む大学は、これらにどのように関わったのでしょうか。附属図書館医学部分館と大学文書資料室の所蔵史料の中から、軍医と銃後に関わる当時の図書・写真・医療器具等によって展示します。なお本企画展は、今年6～9月に附属図書館医学部分館で開催された同テーマのミニ展示を増補したものです。

【ご連絡先】大学文書資料室（東山） ☎052-789-2046 / 附属図書館医学部分館（鶴舞） ☎052-744-2505

【関連企画】愛知県立大学日本文化学部企画「戦争と大学 —愛知県史展—」
(2016年12月15日～2017年1月31日、於愛知県立大学長久手キャンパス図書館)

戦争と大学

企画展

ふたたび

— 軍医と銃後 —

近代日本が戦争を遂行するにあたり、戦場で活動する軍医は不可欠な存在でした。とくに1937年に日中戦争が始まると、軍などから大量かつ急速な育成が求められるようになります。同時に、国内で戦争をささえる「銃後」の体制づくりが叫ばれました。

本学を含む大学は、これにどのように関わったのでしょうか。附属図書館医学部分館と大学文書資料室の所蔵史料の中から、軍医と銃後に関わる当時の図書・写真・医療器具等によって展示します。

なお本企画展は、今年6～9月に附属図書館医学部分館で開催された同テーマのミニ企画展を増補したものです。

附属図書館医学部分館長 濱嶋 信之
大学文書資料室長 竹下 典行



企画展全景 1



企画展全景 2



企画展全景 3

展示ケース・パネル等全景写真 (東山)



展示ケース (小) ①



展示ケース (小) ②



展示ケース (小) ③



展示ケース (小) ④



展示ケース (小) ⑤



展示ケース (小) ⑥



展示ケース (小) ⑦



展示ケース (小) ⑧



展示ケース (小) ⑨



展示ケース (大) ①



展示ケース (大) ②



展示ケース (大) ③



展示ケース (大) ①～③



展示ケース (大) ④ a



展示ケース (大) ④ b



展示台 ① a



展示台①b



展示台②



展示台②a



展示台②b



パネルA



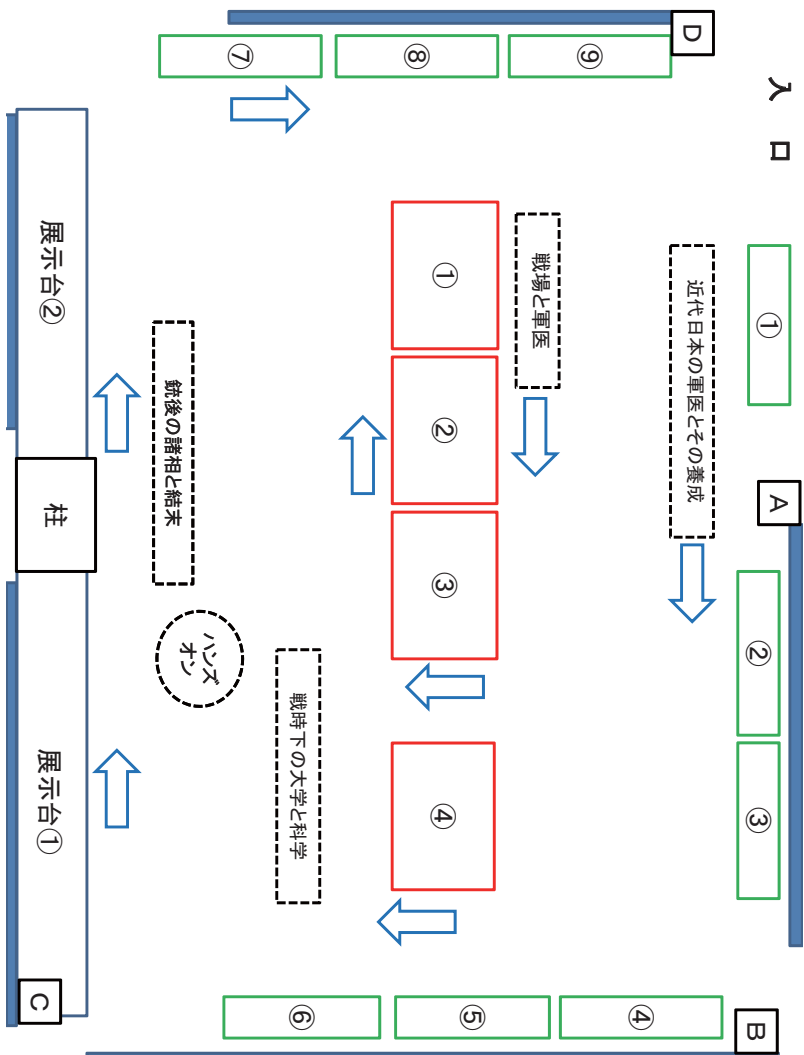
パネルB 1～4



展示台①／パネルC 1～2



展示ケース (小) ⑦～⑨／パネルE



企画展 「戦争と大学 ふたたび 一軍医と銃後」 (東山) 展示物一覧

展示品番号	資料名	説明文 (※備考)
近代日本の軍医とその養成		
ケース小①-1	池田謙斎著／藤田嗣章訳『子宮病論』1878 (明治11) 年	池田謙斎 (1841-1918) は、ベルリン大学医学部に学び、帰国後、陸軍軍医監 (少将相当) などを務め、東京大学医学部初代総理 (学部長) となりました。藤田嗣章 (1854-1941) は、大学東校 (東大医学部の前身) で学び、陸軍軍医補、台湾陸軍軍医部長、朝鮮総督府医院長などを経て、1912 (大正元) 年に軍医総監 (中将相当) となりました。画家藤田嗣治 (1886-1968) の父です。本書は、『医事新聞』第4号 (1878年8月29日) からの抜き書きです。
ケース小①-2	エスマルク著／片山国嘉訳／石黒忠恵補訂『軍陣外科手術』1881 (明治14) 年	エスマルク (Esmarch 1823-1908) は、ドイツのキール大学外科部長で、ドイツ陸軍軍医監です。片山国嘉 (1855-1931) は、1879 (明治12) 年に東京大学医学部を卒業し、ドイツ留学後、1888年に帝國大学医科大学教授となり、裁制医学講座 (後に法医学講座) を開講し、法医学という言葉を初めて使いました。軍陣外科手術とは、軍隊を対象とした外科手術で、本書は、繃帯 (ぼうたい) 篇と手術篇 (格魯魯保児母 (クロロフォルム) 麻醉法、止血法、輸血、四肢の切離、関節の切除など) の2篇から構成されています。
ケース小①-3	石黒大介『戦時衛生勤務研究録』1930 (昭和5) 年	石黒大介は、1936 (昭和11) 年8月に軍医の最高位である軍医総監となり、関東軍軍医部長を務めました。本書は、戦地の衛生勤務についての解説書で、戦傷病の史的考察、行軍に関する衛生勤務、衛生隊、野戦病院、軍兵站衛生勤務、国際法規などと、戦時出征軍衛生基幹業務系統、傷病者後送概況、野戦病院開設要図などの附図から構成されています。野戦病院では、発着部により傷者の心理に配慮し、甲 (直ちに手術室に送るべきもの)、乙 (重症であるが直ちに処置を必要としないもの)、丙 (その他の傷者)、丁 (平病) と患者を選定して、まず病室に収容する、と書かれています。

ケース小②-1	石黒忠恵序文／森林太郎（森鷗外）撰『陸軍衛生教程』 1889（明治22）年	石黒忠恵（1845-1941）は、1869年に大学東校（東大医学部の前身）に勤務し、71年に兵部省の軍医となりました。77年の西南戦争では大阪臨時陸軍病院長を務め、愛知県公立病院に勤務していた後藤新平（1857-1929）の申し出により、外科治療を指導し、内務省衛生局入りを勧めました。当時陸軍医学学校長の石黒が書いたこの序文では、従来の衛生書は原書を翻訳し編集したものが、ドイツで衛生学と軍陣衛生学を学んだ森林太郎（鷗外、当時陸軍一等軍医）による本書は、真の著作物であり本校で刊行した、と述べています。
ケース小②-2	森林太郎（鷗外）講述『衛生学大意』 1907（明治40）年	森林太郎（森鷗外、1862-1922）は、津和野藩（現島根県津和野町）の代々の御典医の家に生まれ、10歳で上京、1881年に東京大学医学部を卒業後、陸軍省に入り軍医となりました。ドイツ留学後、陸軍軍医学舎教官となり、日清・日露戦争に出征、1907年には陸軍軍医として最高の階級である陸軍軍医総監に昇進、陸軍省医務局長となりました。公務のかたわら、1890年に『舞姫』を発表し、創作、翻訳などの多彩な文学活動を展開しました。本書は、森の講話を筆録したもので、土地、下水、埋葬、上水、郡会、家屋、空気、気象、衣服、栄養の10章に編集されています。
ケース小②-3	森林太郎（森鷗外）・小池正直『衛生新篇』 1897（明治30）年	小池正直（1864-1914）は、出羽国鶴岡（現山形県鶴岡市）出身です。祖父は鶴岡で初めて産科を行い、藩医となりました。1881年に東京大学医学部を卒業後、1888年～1889年のドイツ留学などを経て、1905年、陸軍軍医総監となりました。森と小池は、ともにドイツで衛生学を学んでいます。
パネルA	ちよつと名大史 169 院校払い下げ騒擾	※「ちよつと名大史 169」（『名大トピックス』第276号掲載）をパネル化（森鷗外と名大前身校との関わりを紹介）。内容は、大学文書資料室HPを参照。

ケース小③-1	小池正直述／森岡松太郎記「軍陣衛生」 1886 (明治 19) ～ 1888 年頃か	当時、陸軍軍医学舎の教官であった小池正直の講義内容をまとめたものと思われます。1886 年から 1888 年にかけて設置されていた陸軍軍医学舎は、陸軍軍医学学校の前身です。森岡松太郎は、1881 年 10 月に愛知医学校 (名古屋大学医学部の前身) を卒業し、軍医になった人物です。
ケース小③-2	瀬屑英一『戦時衛生要務：軍陣外科ノ部』 1941 (昭和 16) 年	瀬屑英一 (1895-1954) は、1917 (大正 6) 年に海軍軍医学士となり、1921 年 6 月に東京帝国大学医学部を卒業しました。二等巡洋艦大井、一等駆逐艦浦風の乗組軍医などを経て、1936 年に海軍軍医学学校教官となり、1944 年には海軍軍医少将に昇進しました。本書は、海軍軍医科士官が、主として艦船における戦闘時にとるべき準備・処置並びに戦国後の配慮等について、主として日露戦争や第一次世界大戦に関する文献を調査した結果をもとに書かれています。表紙には秘密度が高い秘とあります。
ケース小③-3	陸軍軍医学学校編『軍隊臨時検査法教程』 1944 (昭和 19) 年	陸軍軍医学学校は、旧日本陸軍の医学系の教育機関の一つです。医科大学や医学専門学校を卒業後、軍医見習士官を経て、陸軍軍医学学校の乙種学生 (原則 1 年) となり、入校と同時に大卒者は陸軍軍医中尉、医専卒者は陸軍軍医少尉となります。石黒忠應、森林太郎 (随外) らが校長を務めました。本書は、陸軍軍医学学校の乙種学生に対する軍陣内科学実習教育に、軍陣内科学教室の教官が分担執筆したものです。尿、糞便、血液、脳脊髄液、腹部内臓機能、自律神経機能、ビタミンの各検査と、結核に関する語検査法から構成されています。

ケース小④-1	満洲帝国軍医団『軍医団雑誌』 1935 (昭和10) 年創刊	満洲帝国軍医団は、1935年に『軍医団雑誌』を創刊しました。創刊号には、満洲帝国皇帝の愛新覚羅溥儀（あいにしんかくら・ふぎ、1906-1967）、軍政部長の張景惠、日本の陸軍軍医団長の小泉親彦ら10数名の写真が掲載されています。1942年第46号には、関東軍の軍医中佐の講演記事「細菌戦に就て」が掲載されています。日本軍の細菌戦では、ペスト菌、コレラ菌、チフス菌、炭疽（たんそ）菌などが考えられていました。「眼で見ることが出来ませんからして、或程度人に気附かれずして、思い切って使うことができます」（講演記事より）
ケース小④-2	『海ゆかば：海軍軍医学校戸塚一期戦没者追悼録』 1976 (昭和51) 年	海軍軍医学校は、海軍軍人の医療・衛生を担当する軍医士官、薬剤士官を養成する教育機関で、1889（明治22）年に創設されました。戸塚分校は1944年に、新任軍医科士官らの増員に應えるため開校し、同年7月に全国の医科系大学を卒業した医師・歯科医師・薬剤師らが入学しました。翌1945年1月に、軍医科約850名をはじめとする第一期が卒業し、実戦部隊に配置されましたが、次の在校生は戦争の終結に伴い復員したため、第二期のない学校となりました。
ケース小⑤-1	白楊会編『満洲国陸軍軍医学校：五族の軍医団』 1980 (昭和55) 年	白楊会は、満洲国陸軍軍医学校同窓会です。五族とは、日本人、漢人、満洲人、朝鮮人、蒙古人を指し、満洲国は「五族協和」をスローガンとしました。満洲国では軍医の採用は困難をきわめ、黒竜江省のハルビン南郊の王兆屯にあった軍医養成処を国軍に編入し、1935年5月に陸軍軍医学校と改称しました。同校では、日本人、満洲人、蒙古人らが4年間、起居動作、糧食を共にして、医学と軍事学を修めました。1945年8月15日、王兆屯の白楊（やまならしの異名）の杜のなかで、校長らは第11期～13期軍医候補生を前に、陸軍軍医学校の解散を宣告しました。

ケーヌス⑤-2 (ケーヌス⑥)	名古屋帝国大学臨時附属医学専門部『入学生徒写真』 1939 (昭和 14) ～ 1944 年	名古屋帝国大学臨時附属医学専門部 (1944 年 4 月には「臨時」を削除) には、1939 年に 82 名が合格、78 名が入学しますが、1941 年 12 月の太平洋戦争の開戦により、繰り上げで半年早い 1942 年 9 月に卒業し、10 月にはそれぞれ軍務に就きました。1946 年度には、新入生の募集を停止しました。
パネル B-1	名古屋大学沿革図	※大学文書資料室HP掲載の沿革図と同じ内容。本展示記録には掲載せず。
パネル B-2	名古屋帝国大学 (臨時) 附属医学専門部 (1)	※本企画展のため新規に作成した。
パネル B-3	名古屋帝国大学 (臨時) 附属医学専門部 (2)	※本企画展のため新規に作成した。
パネル B-4	ちよつと名大史 12 医学部附属病院分院 (東新聞時代)	※「ちよつと名大史 12」(『名大トビックス』第 119 号掲載) をパネル化 (東新聞時代の医学部附属病院分院は、附属医学専門部の診療病院として使われていた)。内容は大学文書資料室HPを参照。
戦場と軍医		
ケーヌス大①-1	『陸軍医官徴兵検査手続』 1884 (明治 17) 年	1873 年に徴兵令が制定され、満 20 歳に達した男子は徴兵検査を受け、その結果に基づいて徴兵が行われました。検査する項目は、主に体格・身体能力や健康状態でした。この時期、徴兵検査にあたったのが、検査医官としての軍医です。この冊子は、陸軍軍医で、京都府の検査を担当した森岡松太郎 (名古屋大学医学部の前身である愛知医学校を 1881 年に卒業) が筆写したものです。

ケース大①-2	横井〔信之〕 訳述／森岡松太郎筆記「保爾帝爾氏軍医袖珍必携 卷之二」 年代不明	表紙に「横井軍医長訳述」とあり、横井信之（1847-1891）のことと思われます。横井は、松本良順に蘭方医学を学んだのち、陸軍軍医になった人物です。名古屋徳台病院長時代に、名古屋大学医学部の前身にあたる愛知県立病院・公立医学校の院長兼校長を1年余り務めました。「袖珍必携」、つまり肌身はなさず必ず持っているべき、ということで、軍医が戦場に持って行ったかもしれないかもしれません。
ケース大①-1	『支那事変従軍記章之証』 1940（昭和15）年	従軍記章は、戦争等に参加した者に与えられる勲章の一種で、これはその授与証明書です。日中戦争（支那事変）に陸軍軍医少佐として従軍した長谷川重一は、1896（明治29）年に生まれ、1922（大正11）年に愛知県立医学専門学校（名古屋大学医学部の前身）を卒業して軍医になりました。その後も、勝沼精蔵の下で学び、1939年には名古屋帝国大学から医学博士の学位を授与されています。
ケース大②-2	日中戦争恩賜の包帯 1937（昭和12）年～	長谷川重一陸軍軍医少佐（愛知県立医学専門学校卒業生）が、日中戦争で負傷した際に下賜された包帯です。封に「宮内省皇后宮職（こうごうぐうしき）」とあることから、現在の天皇陛下の母である香淳皇后（1903-2000）から贈られたものと分かります。
ケース大③-1	『満州派遣記念写真帖 歩兵第二十五連隊』 1935（昭和10）年	歩兵第二十五連隊は、札幌市に司令部を置いた第七師団の部隊です。満州事変後の1934年に満州（中国東北部）へ派遣され、長谷川重一陸軍一等軍医（愛知県立医学専門学校卒業生）も従軍しました。開いたページにその姿が写っています。この「断木梁」は満州帝国の領土とされた地域の最北端で、この時に中国軍との戦闘が行われ第二十五連隊にも戦死者が出ています。

ケース大③-2	辞令 任陸軍軍医中佐 1941 (昭和 16) 年	旧日本陸軍では、軍医が属する衛生部などの将校は将校相当官と呼ばれ、階級も歩兵・砲兵などの兵科と異なり、軍医総監・一等軍医といった固有の名称を使っていました。それが 1937 年に、衛生部なども兵科と同じ階級に改められました。その際、長谷川重一（愛知県立医学専門学校卒業生）も陸軍軍医少佐に任じられ、その 4 年後には中佐に昇進しました。
ケース大③-3	勲三等瑞宝章 1942 (昭和 17) 年	1942 年 2 月 14 日付で、長谷川重一陸軍軍医中佐（愛知県立医学専門学校卒業生）が受章したものです。勲三等瑞宝章は、現行制度の瑞宝中綬章にあたります。
ケース大③-4	『シベリア抑留』 俘虜用郵便葉書』 1945 (昭和 20) ～ 1949 年	1944 年、長谷川重一陸軍軍医中佐は、満州北部の佳木斯（じやむす）第一陸軍病院に病院長として赴任しました。その後、日本軍の降伏に伴い、その前に満州に侵攻して来ていたソ連軍に投降し、捕虜（俘虜）としてシベリアに抑留されました。これらの葉書は、抑留中の長谷川が日本の家族に送ったものです。
ケース大③-5	『シベリア抑留』 引揚証明書』 1949 (昭和 24) 年	シベリア抑留中、長谷川重一は収容所内の病院で、診療や帰国する抑留者たちの健康診断などの業務に従事しました。一人だけ別の場所に移されて行かれ、ソ連軍の取り調べを受けながら監視付の生活を送った時期もあったことです。長谷川は、1949 年 8 月に日本への帰還を果たし、名古屋市内で内科病院を開業。100 歳まで現役医師として活動し、地域医療に大きく貢献しました。

ケース大②-3	藤田近二『戦場絵日記：藤田軍医少佐遺稿』 1939 (昭和 14) 年	藤田近二 (1895-1939) は、1937 年 8 月に充員召集され輸送指揮官として出征し、上海、杭州など各地を転戦しました。1939 年 2 月、江西省北部の兵站病院で戦病死し、同日付で軍医少佐の階級が贈られました。絵が趣味で、「絵日記大尉」「彩管大尉」として新聞等で報道されました。戦地で妻の病死を 1 か月後に知り、「悲壮なるものよ…しかし自分は、現在戦争をしている軍人だ。自分の任務は重い。身体が続く限り精神のありたけを尽さねばならない」と書いています。表紙には「憲兵司令部 検閲済 14.8.22」の検閲印があります。
ケース大②-4	軍医携帶囊の衛生材料 1940 年代前半	軍医であった大村明 (1911-1990) が携帶していた衛生材料です。大村明は福岡県出身で、1938 年に名古屋医科大学を卒業後、勝沼精藏の内科学教室の副手、陸軍軍医候補生となり、のちに満州の掖河(えきか) 陸軍病院に勤務しました。軍医携帶囊(袋) には、野外で救急処置を施すのに必要な衛生材料が入っています。消毒用アルコール入れ、ヨードチンキ・ホルム酸錠・アヘン錠(麻酔)・昇汞錠(しょうこうじょう、消毒液用の塩化水銀) などの薬剤、滅菌ガーゼ包、耳鏡などです。
ケース大②-5	記名布 1945 (昭和 20) 年	1945 (昭和 20) 年 8 月 9 日に始まったソ連の満州への侵攻時に、軍医である大村明が手にしていた荷物の記名布です。大村は復員後の 1957 年度、博士論文「実験的腫瘍に対する Hyaluronidase の影響と制癌剤作用増強に就いて」により、名古屋大学医学部から医学博士(旧制)の学位が授与されました。
ケース大①-3	LPレコード盤『望郷の歌：掖河陸軍病院』 1970 (昭和 45) 年以降	陸軍病院は、陸軍が部隊所在地などに設けた、傷病兵の治療・看護のための病院です。掖河陸軍病院は満州東部にありました。1945 (昭和 20) 年 8 月 9 日から始まったソ連軍の満州への侵攻後、ソ連軍の管理下において、旧掖河陸軍病院の病舎・兵舎を使って、日本軍の軍医・衛生兵によって病院を開設することになりました。レコード盤によれば、「掖河陸軍病院の歌」は戦後に掖河陸軍病院で作詞したものとされています。

戦時下の大学と科学

ケース大④-1	名古屋帝国大学医学部アルバム (昭和19) 年	1944	日本では、1925 (大正14) 年の「陸軍現役将校学校配属令」に基づき、中等学校以上の学校には現役将校が配属され、正正式な授業として軍事教練が実施するようになりました。ただ大学では、学科だけで実地教練は行わない場合もあるのが実状でした。しかし日中戦争開始後の1939年、文部省は大学における軍事教練の必修化を命じました。これにより、毎週2時間の軍事教練を標準とし、実地教練も確実に行われるようになりました。
ケース大④-2	『医学生とその時代』	2008 (昭和20) 年	本書は、東京大学医学部・医学部附属病院創立150周年記念として編纂された写真集で、卒業アルバムの写真が掲載されています。1927 (昭和2) 年に施行された「兵役法」は、大学生は27歳まで徴兵を延期すると定めていました。しかし、日中戦争が始まると兵士の不足が問題となり、1939年の改正によって、延期は25歳まで (医学部学生は26歳まで) とされました。そして遂に1943年10月、東条英機内閣は大学生等の徴兵延期措置を停止する勅令を公布し、文科系の大学生は、いわゆる「学徒出陣」として軍隊に入営していききました。
ケース大④-3	『佳木斯医科大学新聞』第2号 (第1回生卒業記念号) 1943 (昭和18) 年		満州国立佳木斯医科大学は、1940 (昭和15) 年に設立されました。4年制で、養成人員は各年150名、入学資格は日本の中学校4年修了 (16歳) 程度です。開拓地医師の養成が目的で、第1学年には内地での募集と共に、満州開拓青年義勇隊訓練生から80名が選抜されました。初代学長は、航空医学を研究し、日本初の衛生飛行機 (患者輸送機) を完成させた元陸軍医学学校校長の寺師義信 (1882-1964) であり、教務主事は、生理学者で京都帝国大学教授の正路倫之助 (1886-1962) でした。
ハンス・オン	『戦地だより』 ～1940年9月	1937 (昭和12) 年10月	※『名大学会報』(のち『名帝大医学部学会報』、さらに『名大医学部学会報』と改題) の「戦地だより」のコーナーをコピーしたものをフレイリソングした。

展示台①-1	<p>島中靖雄・間沢久雄訳『航空医学解説』 1944 (昭和 19) 年</p>	<p>原著者のグロウ (Malcolm Cummings Grow 1887-1960) は米国防空軍の最初の軍医総監です。同じくアーナムスローンズ (Harry George Armstrong 1899-1983) は米国防空軍少将・医師で、航空医学のパイオニアとして知られています。「戦局の推移につれ、航空兵力の強化は日増しに重要性を加えつつある。(中略) 航空兵力を量において、また質において、しかも可及的迅速に充実することは、時局下、国民全般に課せられた最重要課題である。この課題の遂行こそ、正しく聖戦成敗の岐路をなすとも云い得られる。」(東京帝国大学航空研究所の淡路門次郎の序文より)</p>
展示台①-2	<p>小熊悍『戦時研究と生物学』(『科学朝日』) 1945 (昭和 20) 年</p>	<p>小熊悍 (1886-1971) は北海道帝国大学理学部教授で、昆虫学者、遺伝学者です。この時評では、戦時研究の「課題がほとんど全部戦争の第一線活動に直接関係する諸問題に終始しているのは止むを得ないし、また当然のことでもある。しかし銃後もまた戦の第一線となった昨今では、銃後に課題を持つ研究も当然戦時研究として、強力にかつ急速に推進して行かなくてはならない、そしてその銃後課題の筆頭に、作物の急速増産の問題が取り上げられてよいと思う」と述べ、北海道のトウモロコシ、じゃがいもを例に挙げています。※小熊悍(おくま・まもる)</p>
展示台①-3	<p>『碧素：国産ペニシリン開発の旗振り 稲垣軍医少佐と一高生学徒動員』 2005 年 (平成 17) 年</p>	<p>1943 (昭和 18) 年 12 月、ドイツから来た潜水艦 U ボートの艦内にあった医学雑誌の、ベルリン大学教授によるペニシリンの記事を読んだ陸軍軍医学校の稲垣克彦軍医少佐 (1911-2004) は、1944 年 2 月にペニシリン委員会を結成し、同年 11 月には国産ペニシリン「碧素」(敵性語を避け、一高生により命名) が完成しました。碧素は、1945 年 3 月 10 日の東京大空襲の際に使用され驚異的な効果を発揮しますが、物資の不足、空襲などで工場での大量生産はできず、終戦を迎えました。</p>

展示台①-4	技術院『戦時研究員制度二就テ』 (昭和19) 年	1944	技術院は、戦時科学技術動員の中核を担うべく1942年に設置された、内閣直属の機関です。1943年10月に、技術院の主導により、内閣が設けたのが「戦時研究員制度」です。戦時研究員は、戦争のために急速に成果をあげる必要のある科学技術の重要課題に取り組むものとされ、首相を会長とする研究動員会議により選ばれました。その数は1944年には1,122人にのびりました。同年の研究課題は183で、その7割の担当官庁が陸軍省と海軍省でした。
展示台①-5	小野稔『太田元次軍医の汪兆銘看護日誌抄』 1988 (昭和63) 年		太田元次(1913-1990)は、1938(昭和13)年に名古屋医科大学を卒業後、斎藤真教授の外科科学教室の副手を経て、同年5月に軍医候補生として入隊、1944年1月に軍医大尉で召集解除、再び斎藤外科科学教室の副手となりますが、同年7月に臨時召集されました。太田は、名古屋帝国大学医学部附属医院に極秘入院した汪兆銘の専属医の1人となりました。本書はその際の記録です。※太田元次(おおた・もとつぐ)
展示台①-6	太田元次『戦前派病院院長の回顧録』 正・続 1979 (昭和54) 年	正・	正編では、汪兆銘との思い出、幼少期から官立名古屋医科大学を経て、南京・応山などでの軍医としての生活、戦後の名古屋救済会病院の開院まで、続編では、名古屋救済会病院長、愛知医科大学(戦後の私立大学)学長時代が回顧されています。
パネルC-1	戦時下の名宿大		※企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立七〇周年(創基一三八周年)記念―」(2019年)で作成したパネル。パネルの内容は、『名古屋大学文学書資料室紀要』第18号を参照(名古屋大学学術機関リポジトリで閲覧可能)。
パネルC-2	ちよつと名大史 22 汪兆銘 (汪精衛) の 梅		※「ちよつと名大史22」(『名大トビックス』第128号掲載)をパネル化。内容は大学文学書資料室HPを参照。

戦後の諸相と結末

展示台②-1	三好益来、内藤桑三、本城正夫『戦時下傷者救急法』1943 (昭和18) 年	戦時下の負傷者は、平時に加えて、空襲による戦傷者の発生もあり、新しい救急法が必要とされたことに応えて書かれたのが本書です。創(きず)の処置、包帯術、出血の処置、人工呼吸法、骨傷(骨折や脱きゅうななど)の救急法、負傷者の取扱と運搬法、などから構成されています。本書執筆時、三好益来は陸軍軍医大佐であり、1943年に学位論文「現地において治癒せる骨戦傷について」により東京帝国大学から医学博士号を授与されました。内藤桑三は陸軍軍医少佐、本城正夫は陸軍衛生中尉でした。※三好益来(みよし・ますき)、内藤桑三(ないつと・そうぞう)、本城正夫(ほんじょう・まさお)
展示台②-2	医学部附属病院庶務掛『大東亜戦争戦災記念写真』フマール作成年代不明	昨年、医学系研究科・医学部で発見された資料です。①勝沼精蔵(名帝大医学部附属医院長)・山元昌之(同医院事務長)『秘病院防空―戦跡と戦訓―』(1945 (昭和20) 年4月3日稿)、②1965年に整理された、1945年3月12日、19日、25日の空襲により被災した建物と焼夷弾などの写真、③1959年に集められた、名古屋帝国大学医学部附属医院に極秘入院していた南京国民政府主席の汪兆銘が、1944年11月に死亡したことを報じる掲示など、が綴られています。
展示台②-3	杉山千佐子『おみすてになるのですか』1999 (平成11) 年	今年、101歳で亡くなった杉山千佐子さんは、全国戦災被害者連絡会(全傷連)会長として、国からの補償がない民間の戦争被災者の救済を求めて長く活動してこられました。杉山さんは、1932年から45年までの13年間に、名古屋医科大学(のち名古屋帝国大学医学部)の解剖学教室で標本作りなどの仕事をしていました。そして1945年3月24日の名古屋大空襲により、左の腰がつぶれるほどの重い火傷を負いました。

展示台②-4	名古屋市復興局編『名古屋市復興都市計画図』 1946 (昭和21) 年	空襲により地域の4分の1が被災したとされる、名古屋市の復興都市計画の立案・実行の中心になったのが、東京帝国大学工学部で土木工学を専攻し、木曽三川の治水なども担当した、名古屋市技監(のち助役)の田淵寿郎(たぶち・じゅろう 1890-1974)です。田淵らによる戦災復興の基本計画は、早くも同年12月に決定しました。これに基づき、東西(若宮大通)と南北(久屋大通)の2本の100m道路が整備され、市内に約280か所あった墓地は市の東部、平和公園に移転させることになりました。田淵は、のちに名古屋市名誉市民の第1号に選ばれました。
ケース小⑦-1	三菱航空機株式会社名古屋製作所『絵葉書』 1927 (昭和2) ～ 1928 年頃	名古屋市では、早くから航空機工業の発展が始まり、地元のアヲ知時計電機とともにその中心となったのが三菱でした。1920 (大正9) 年、名古屋市に三菱内燃機が設立され、翌年に本社が東京に移されて三菱内燃機名古屋製作所となりました。1928 (昭和3) 年に三菱航空機名古屋製作所と改称され、専ら航空機関係の生産に従事することになりました。この絵葉書は、ちょうどその頃に発行されたものです。1934 年、三菱航空機は三菱造船と合併し、三菱重工業(名古屋航空機製作所)となりました。工場は、名古屋港沿岸の大江にありました。
ケース小⑦-2	三菱重工業株式会社名古屋航空機製作所『兵器を造る我等の覚悟』 1943 (昭和18) 年	当時の愛知県尾張地域は、日本の航空機(軍用機)の一大生産地帯となっており、その中心である名古屋を代表する航空機製造企業が三菱重工でした。このため1944 年12月から始まる名古屋空襲では、三菱重工の航空機工場がいち早く攻撃目標とされました。本書は、1943 年5月28 日(製作所長岡目NHK)で放送された岡野保次郎名古屋航空機製作所長の講演「兵器を造る我等の覚悟」のほか、東條英機首相兼陸相、谷萩那華雄大本営陸軍報道部長など全12 編の放送・講演集です。

ケース小⑧-1	厚生省『職業能力申告手帳』 1944 (昭和 19) 年	国家総動員法に基づき、1939 年に国民職業能力申告令が施行されました。これにより、16 歳以上 50 歳未満の男子で、指定職業の従事者及び指定教育機関の卒業者には、氏名・生年月日・本籍・居住地・兵役関係・学歴・職業名・就業場所などを記載する「職業能力申告手帳」が交付されました。その後、対象範囲が未経験者や未婚若年女子にまで拡大されて行きました。なおこの手帳は、名古屋帝国大学理学部の山崎一雄教授のものです。
ケース小⑧-2	情報局編輯『写真週報』 227、268 号 1942 (昭和 12) 年～1943 年	『写真週報』は、1937 (昭和 12) 年、情報委員会を拡大・改組し、内閣総理大臣の下に発足した内閣情報部により、1938 年に創刊された週刊の国策グラフ雑誌です。268 号 (1943 年) には、名古屋鶴舞女子機械工補導所が紹介されています。内閣情報部は 1940 年に、外務省情報部、陸軍省情報部、海軍省軍事普及部、内務省警保局検閲課など各省に分かれていた情報事務を統一化することをめざして、情報局へと拡大・改組されました。
ケース小⑧-3	『産業従業員の採用時身体検査法・定期健康診断法』 1937 (昭和 12) 年	日本産業衛生協会の産業医学叢書の第一冊として発行された本書には、附録「身体検査規程類集」として、1923 (大正 12) 年に設置され、兵器・軍需品・火薬類などを製造した陸軍造兵廠 (ぞうへいしょう) と、海軍職工及び鉱夫志願者、南満州鉄道株式会社 (満鉄) などの身体検査規則が掲載されています。陸軍造兵廠身体検査規程では、成年男子 (満 20 歳以上) は、身長 154cm、胸囲 78cm、体重 50kg 未満、成年女子 (満 18 歳以上) は、身長 143cm、胸囲 73cm、体重 45kg 未満は不合格としています。

ケース小⑨-1	『大東亜戦争記念報国絵葉書 第一輯』 1942 (昭和17年) ～1943年頃	日本は、1941年12月8日に真珠湾のアメリカ軍を奇襲攻撃して始めた太平洋戦争（アジア太平洋戦争）を、欧米諸国の植民地支配から東アジアを解放して「大東亜共栄圏」を実現するためのものと主張し、「大東亜戦争」と呼びました。この絵葉書は、郵便事業等を担当する逓信（ていしん）省が発行し30銭で売出したものですが、売上金のうち10銭は国防献金に回されることになっていました。
ケース小⑨-2	内閣情報部・情報局編輯『週報』102、 120、389号 1939 (昭和14) 年～1945 年	『週報』は、官報附録として1936 (昭和11) 年10月に政府が創刊した週刊の広報誌です。各省の情報宣伝や世論指導の連絡調整にあたっていた情報委員会が編集を担当しました。情報委員会は、1937年に内閣情報部（50号～）、1940年には情報局（218号～）へと組織が改編・拡大され、戦争遂行のための世論形成、思想取締の強化が目的となっていきました。389号（1944年）は紙質が悪くなり、表紙の緑色が一部だけになっています。
パネルE	関連事項年表	※2枚。本企画展で展示中の資料は太字にした。

※展示品番号は、本展示記録掲載の写真に付したキャプション及び展示室見取り図と対応している。例えば、「ケース小①-1」は展示ケース（小）①に入れて展示した1つめの展示資料、「ケース大①-1」は展示ケース（大）に入れて展示した1つめの展示資料、「パネルB-1」はエリアBに掲載した1つめのパネル、という意味である。

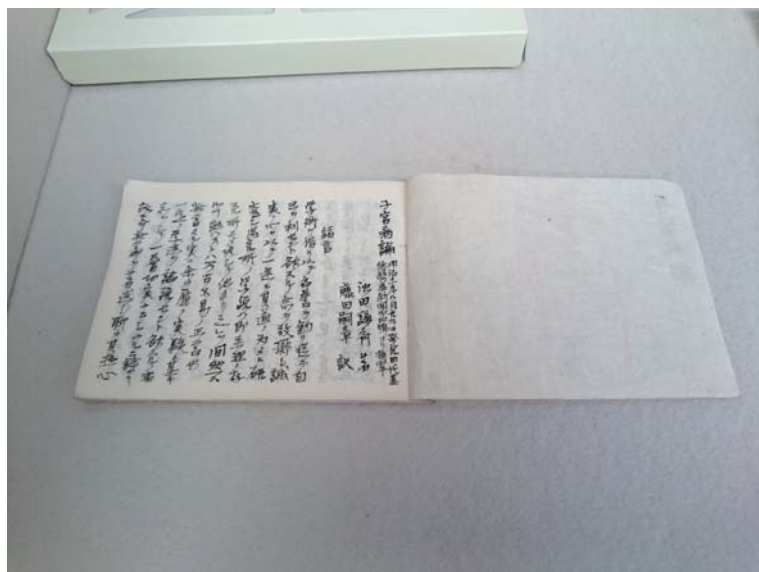
※「戦場と軍医」コーナーは、大展示ケースをタテに3つ並べ、その周囲を回りながら見るように構成したため、本表の掲載順が変則になっている。

※グリーンの色が付いているものが大学文書資料室所蔵、それ以外は附属図書館医学部分館所蔵である。

※パネルは、大学文書資料室が作成した。ただしパネルEは、附属図書館医学部分館が鶴舞でのミニ企画展で展示した年表を、大学文書資料室が大幡に校訂してパネル化したものである。

※展示品の資料名にも適宜ふりがなを付けたが、本展示記録では省略した。

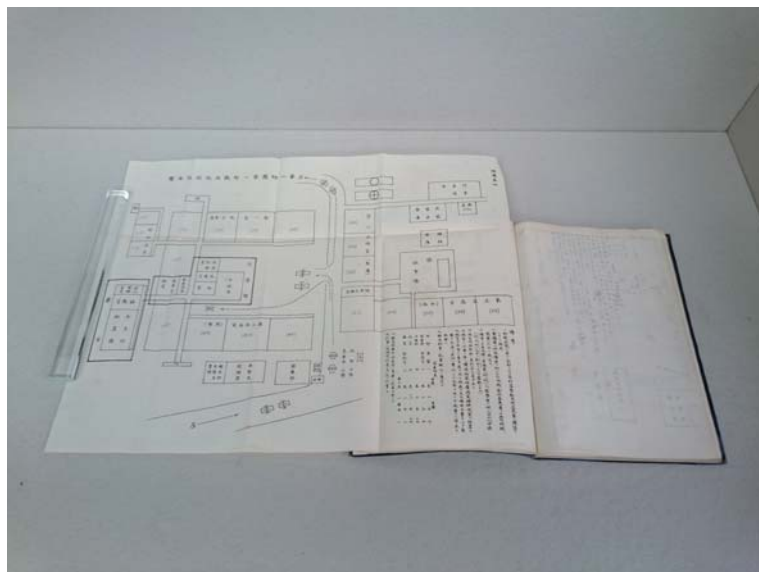
※展示品の説明文における段落は、本展示記録では省略した。



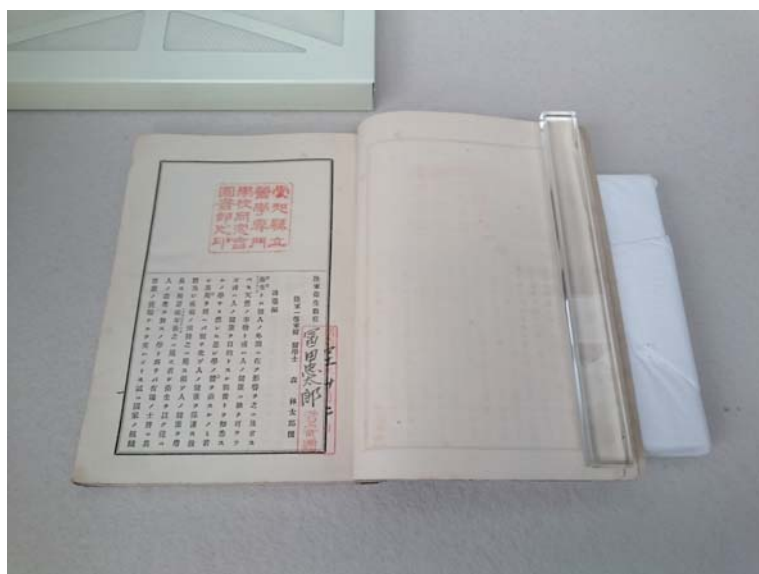
ケース小①-1



ケース小①-2



ケース小①-3



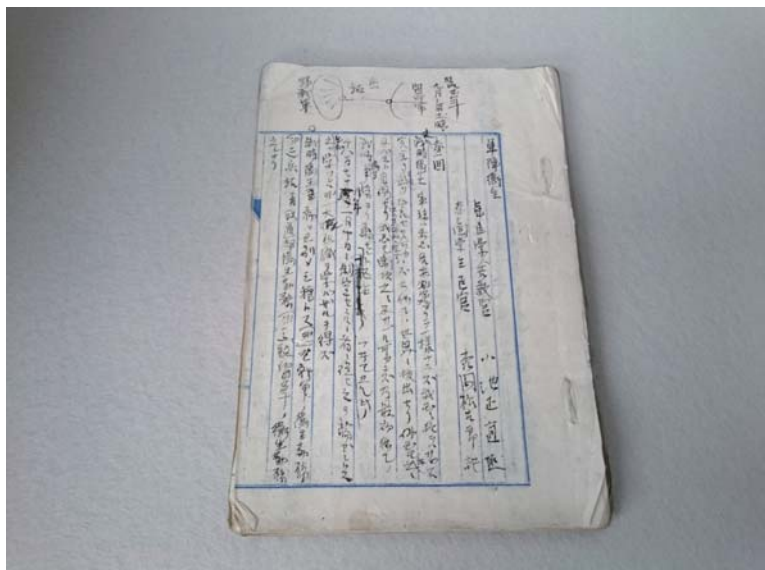
ケース小②-1



ケース小②-2



ケース小②-3



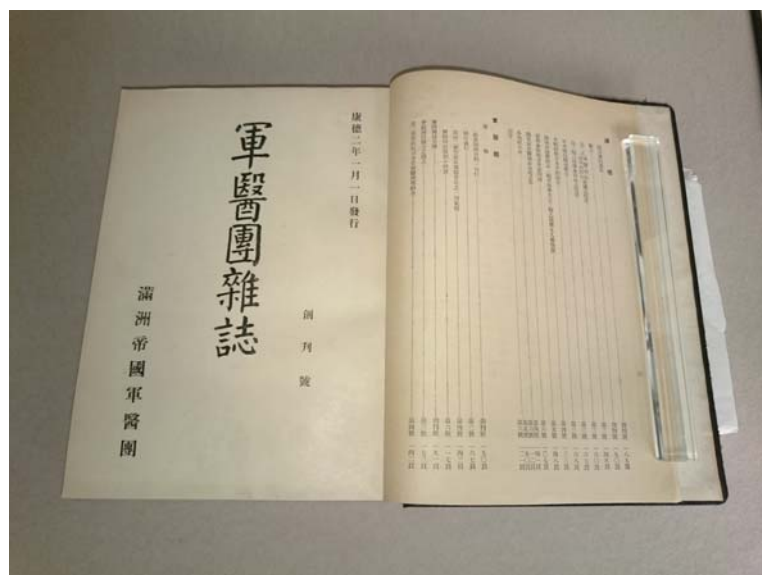
ケース小③-1



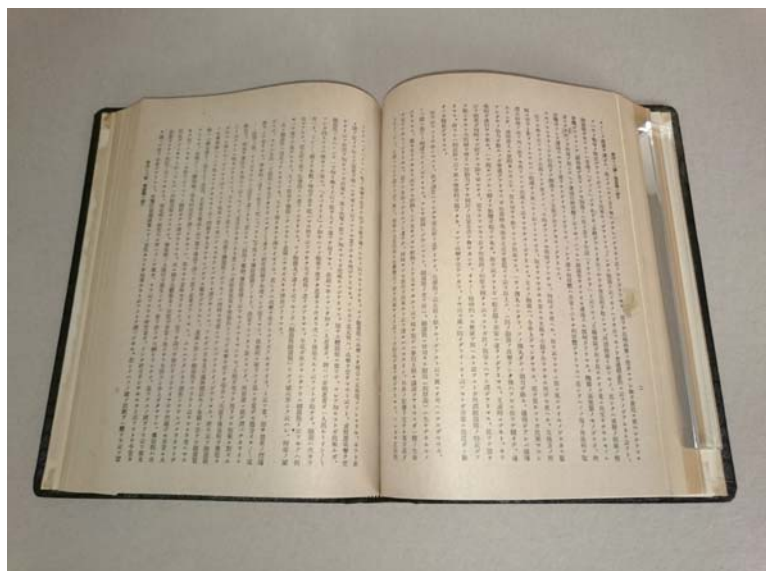
ケース小③-2



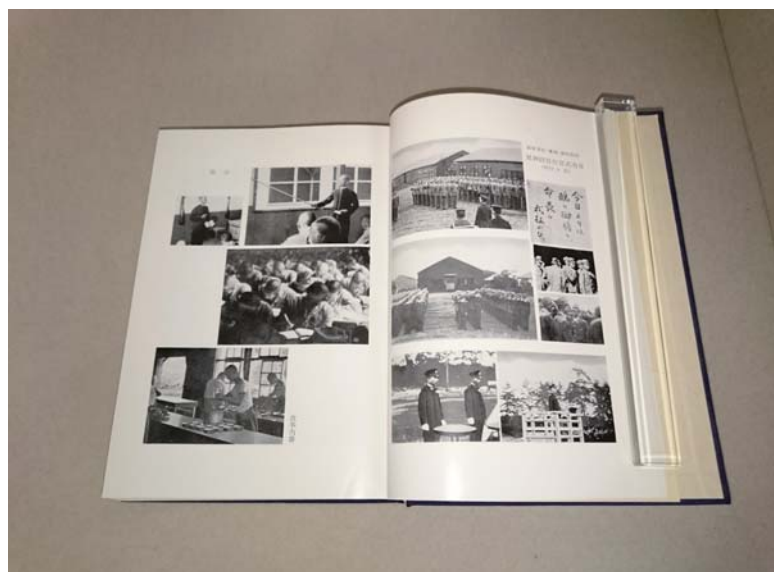
ケース小③-3



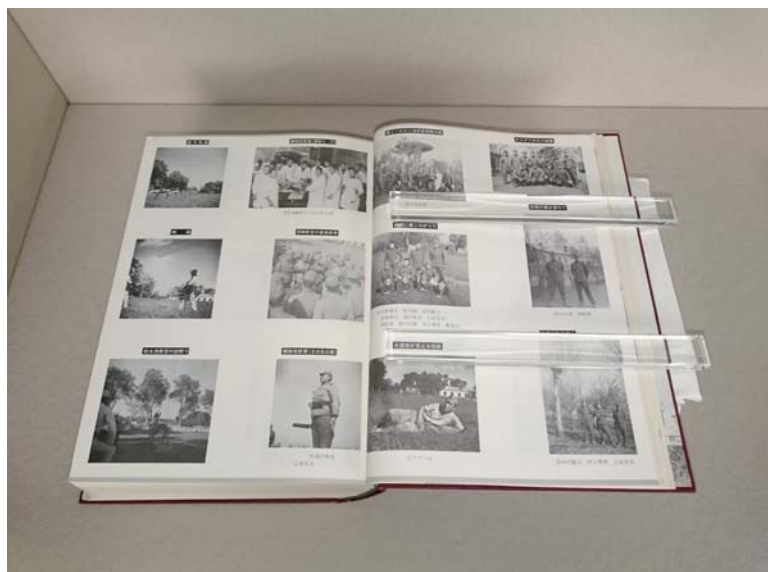
ケース小④-1a



ケース小④-1b



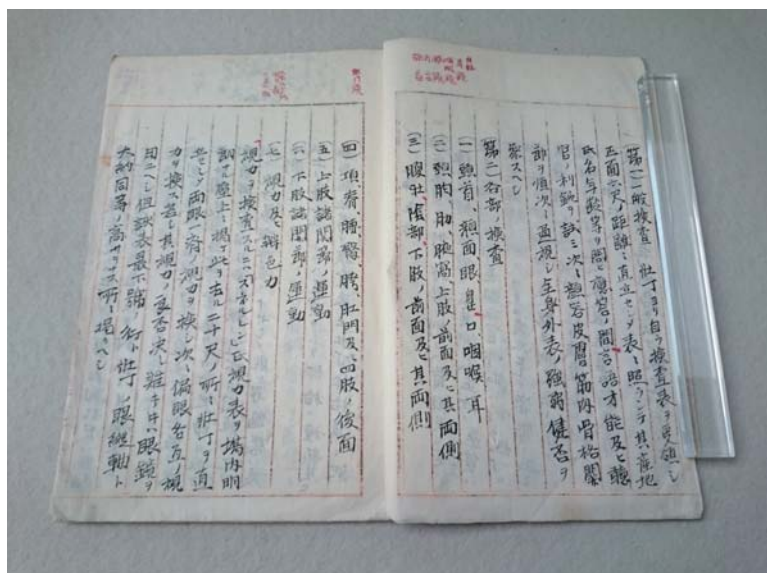
ケース小④-2



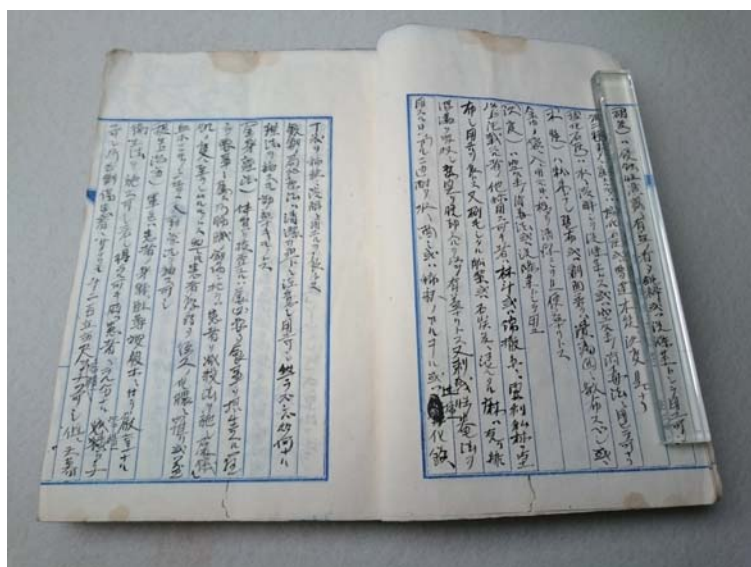
ケース小⑤-1



ケース小⑤-2



ケース大①-1



ケース大①-2



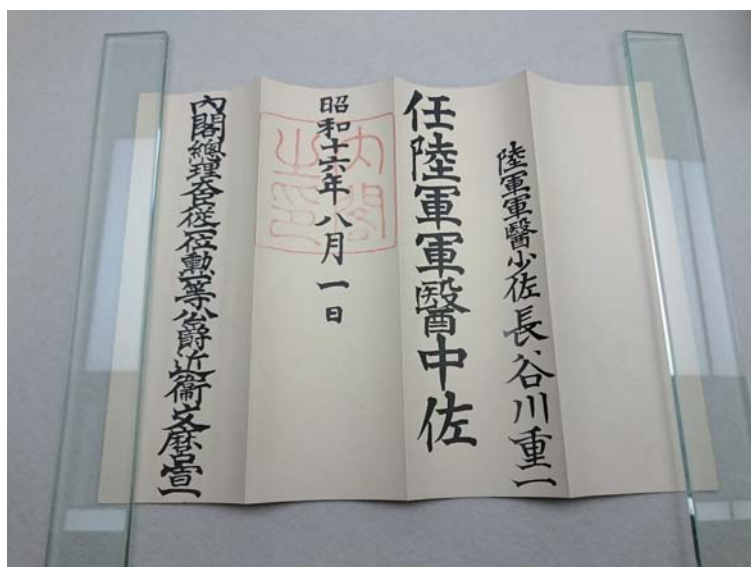
ケース大②-1



ケース大②-2



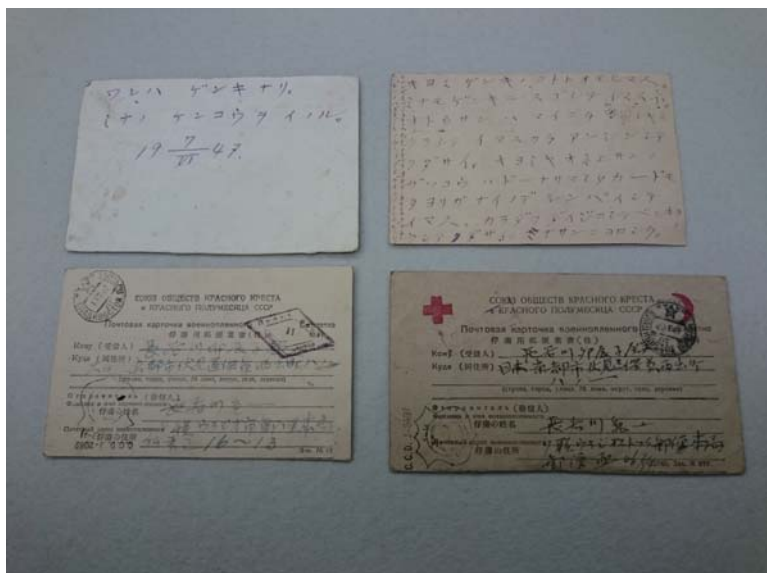
ケース大③-1



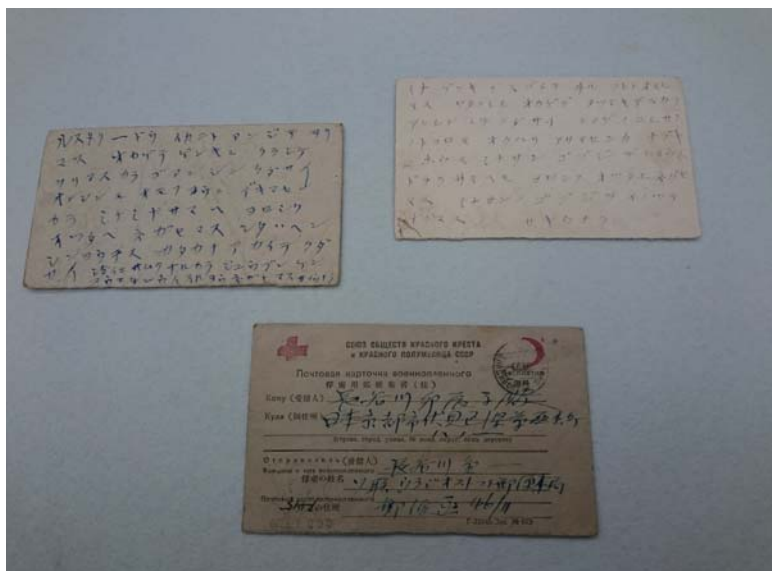
ケース大③-2



ケース大③-3



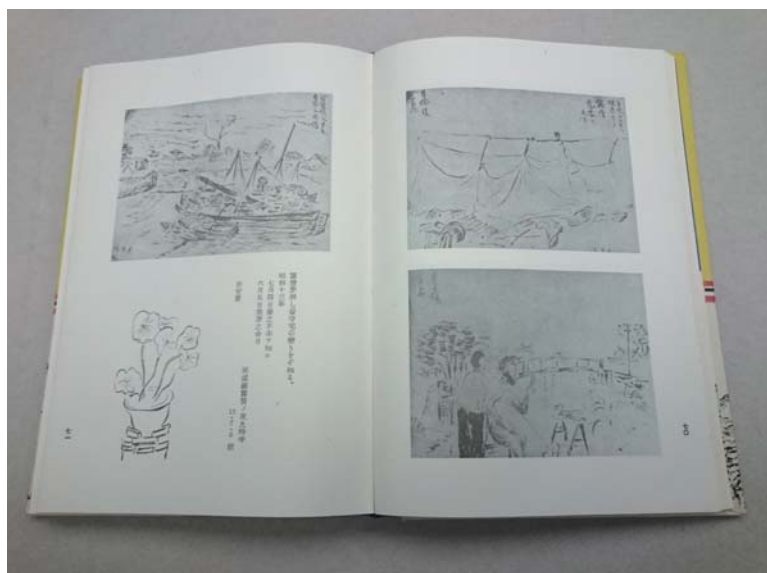
ケース大③-4a



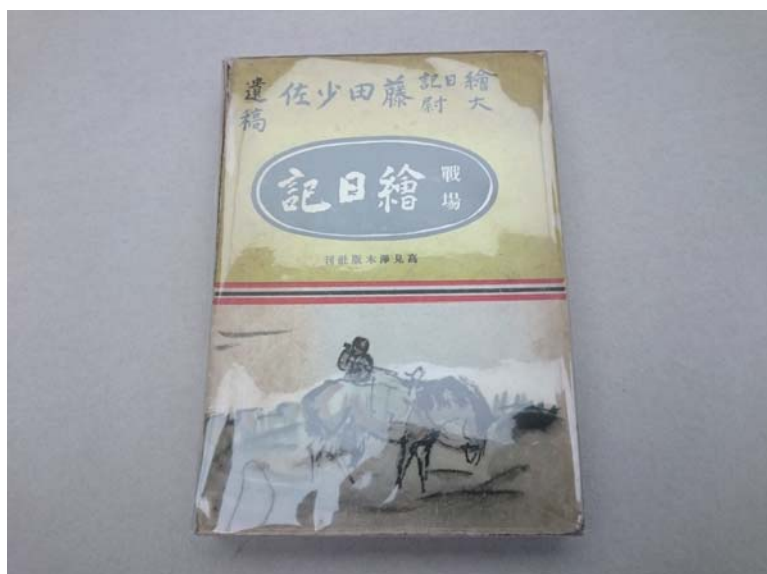
ケース大③-4b



ケース大③-5



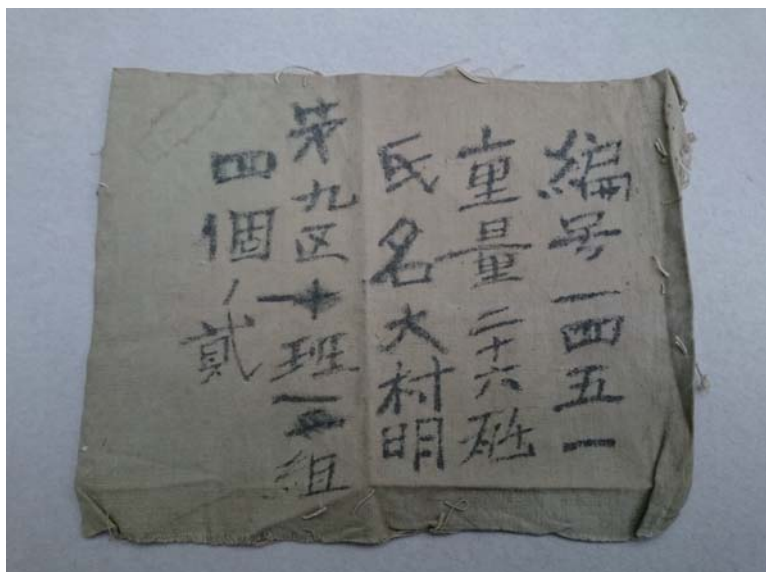
ケース大②-3a



ケース大②-3b



ケース大②-4



ケース大②-5



ケース大①-3a



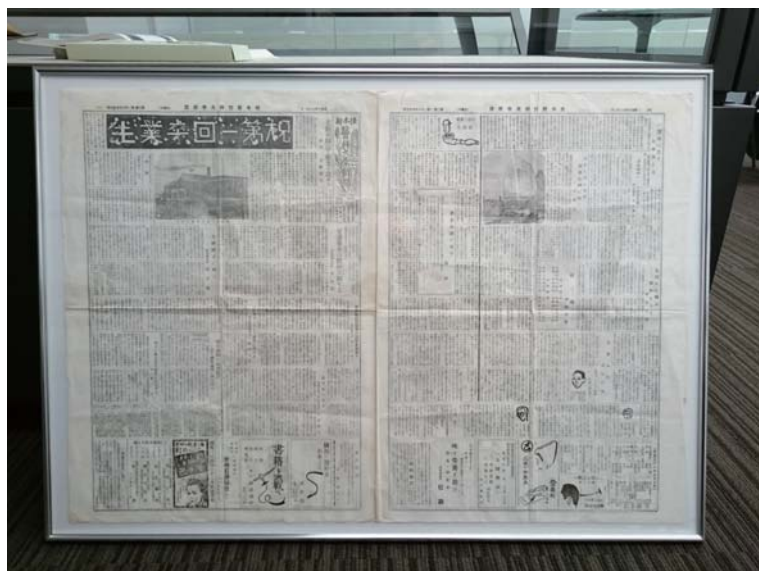
ケース大①-3b



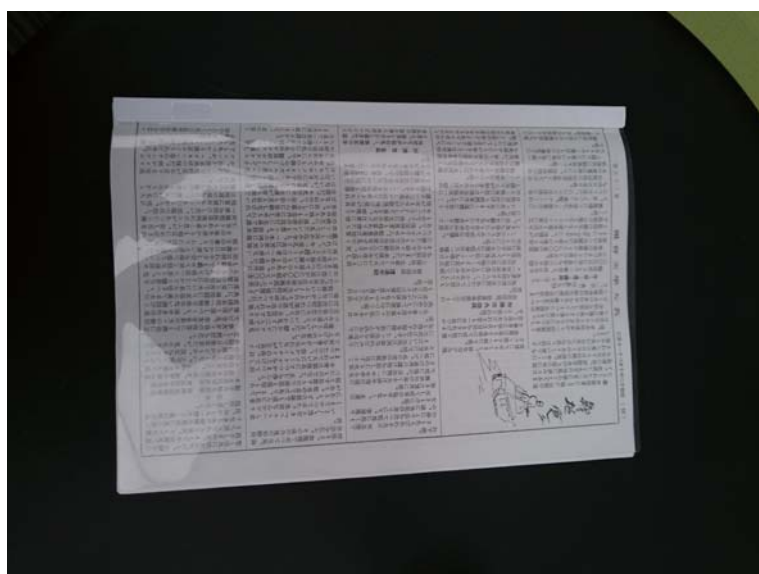
ケース大④-1



ケース大④-2



ケース大④-3



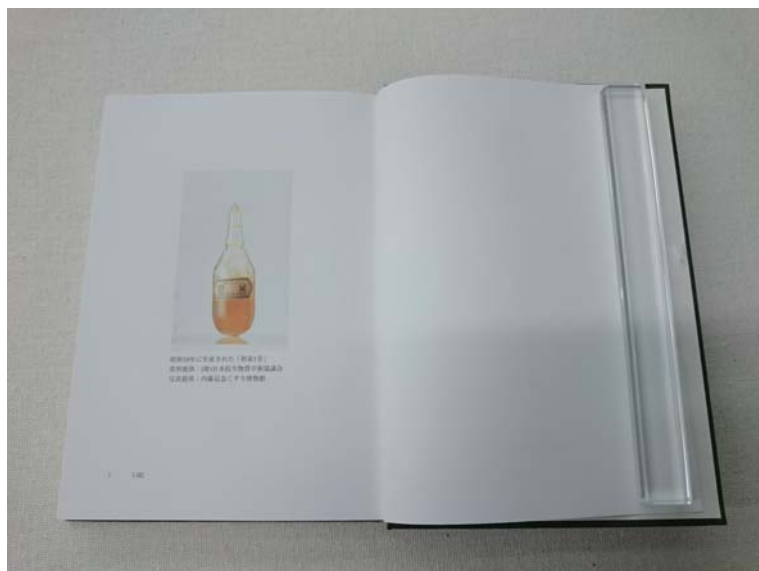
ハンズオン



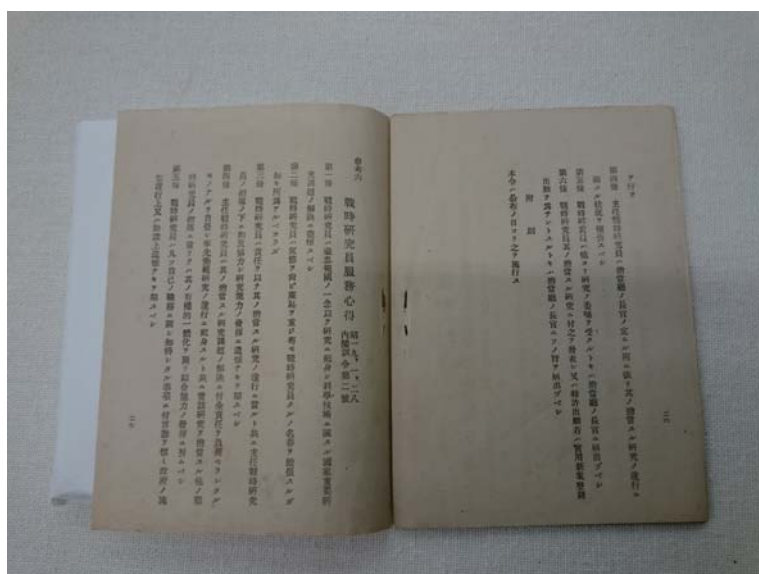
展示台①-1



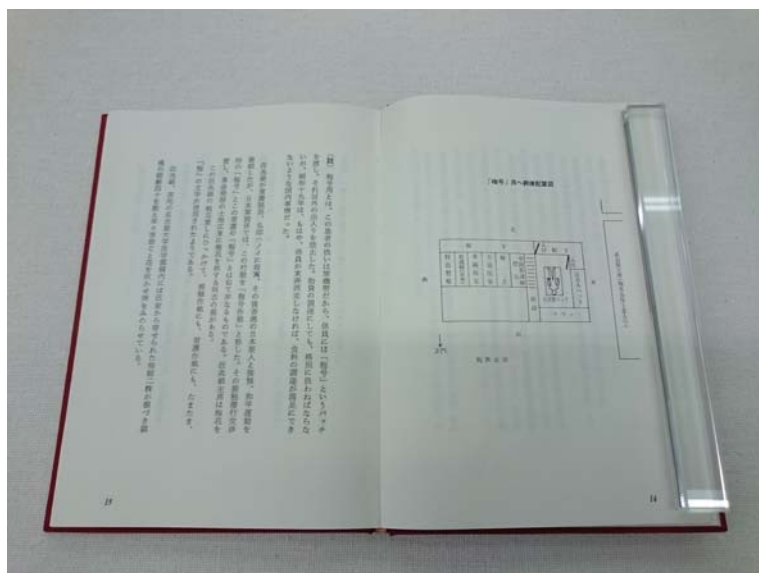
展示台①-2



展示台①-3



展示台①-4

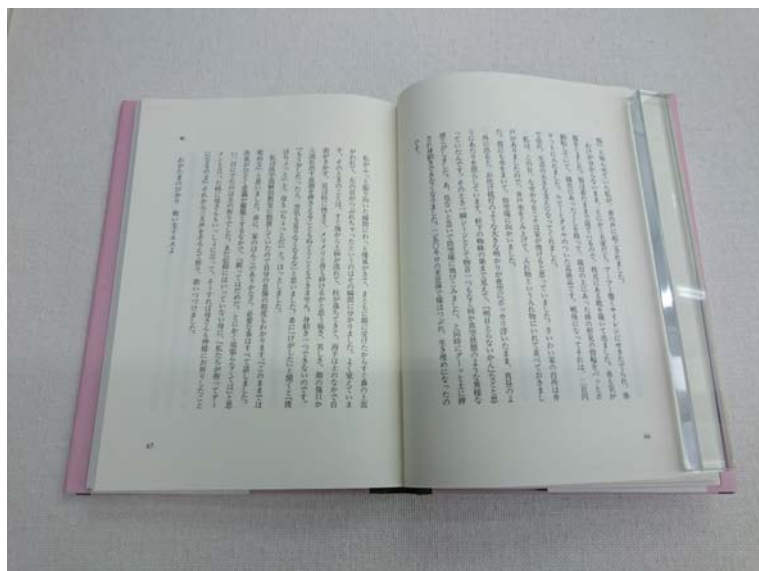




展示台②-1



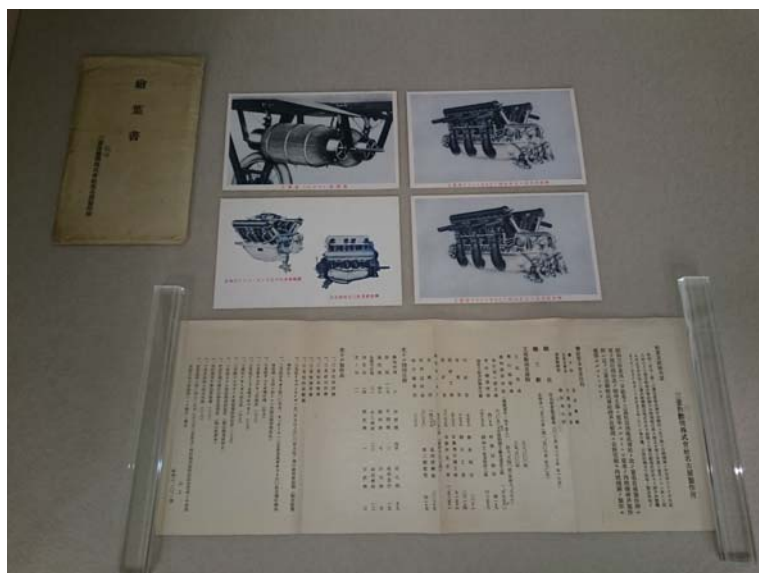
展示台②-2



展示台②-3



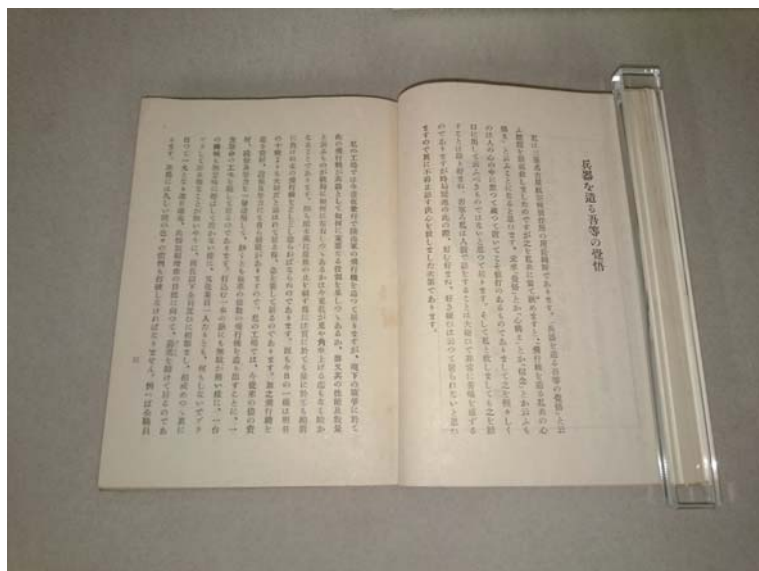
展示台②-4



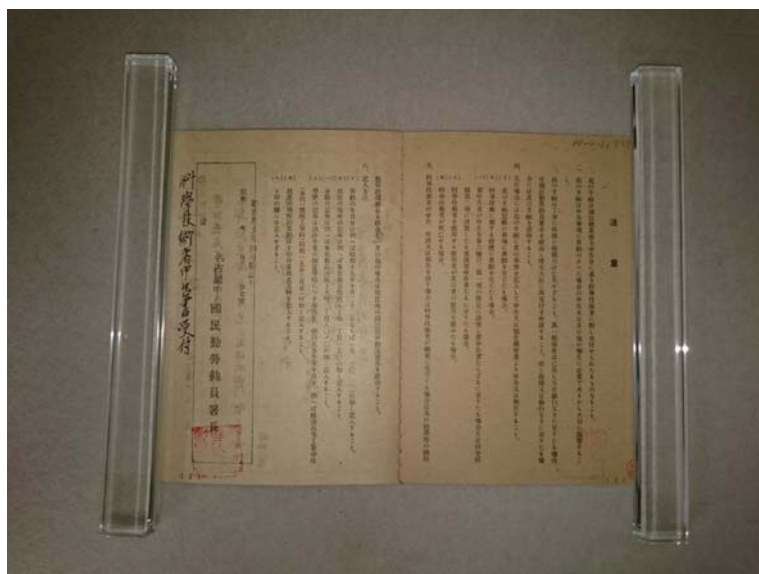
ケース小⑦-1a



ケース小⑦-1b



ケース小⑦-2



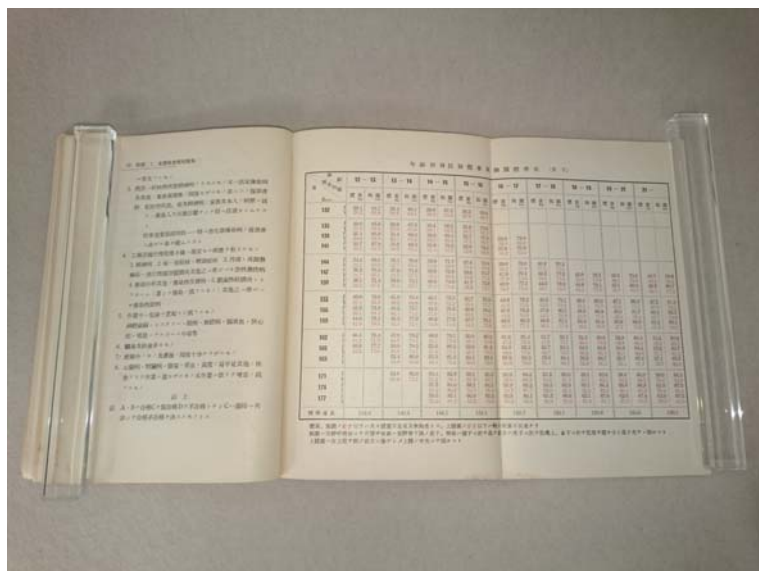
ケース小⑧-1



ケース小⑧-2a



ケース小⑧-2b



ケース小⑧-3



ケース小⑨-1



ケース小⑨-2

名帝大(臨時)附属医学専門部(1)



授業風景①

1939年5月15日の勅令により、内地の6帝国大学及び6医科大学とともに、名古屋帝国大学にも臨時附属医学専門部が設置された。授業には鶴舞の校舎を使用し、柔剣道場や学生会会所も医学部と共用した。



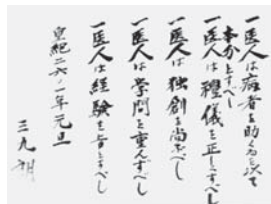
授業風景②

入学資格は、中学校卒業者か、専門学校入学検定規程による検定試験・無試験検定の合格者であった。卒業者には、「名古屋帝国大学附属医学専門部医学士」の称号が与えられた。



軍隊での体験実習

学生は、卒業後ほとんどが軍医となった。



医人五訓

加藤三九郎教授(外科学)による。1940年から医学専門部に専任教授を置けることとなり、加藤教授は翌年に就任した。



八事結核診療所での回診風景

臨床実習は医学部学生との共用に難があったため、医学部附属医院分院ができるまでは名古屋市内の病院に依頼して急場をしのいだ。



医学部附属医院分院となった陸田ビルディング(右、1926年頃) 1943年に寄附された建物が医学部附属医院分院とされると、ここが医学専門部専用の診療病院となった。分院について詳しくは別パネルを参照。

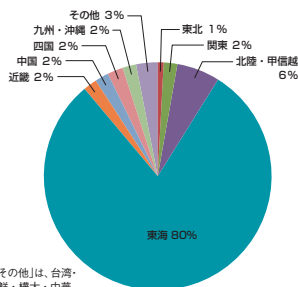
パネル B-2

名帝大(臨時)附属医学専門部(2)

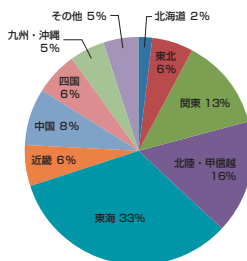
[illegible]

臨時附属医学部専門部学科課程および教授時数(1939年)

ただし、特別の必要がある時は、学科目や教授時数を変更したり、定時以外の時間に臨時講演や実習を行うことも許されていた。



名帝大臨時附屬医学専門部学生の出身地の割合(1942年)



名帝大医学部学生の出身地の割合(1942年)

医学部に比べ、医学専門部の学生は東海四県の出身者がぎわめて多く、東海地域における軍医養成を担っていたことが分かる。

パネル B-3

西暦	元号	関連事項年表（太字は本企画展で展示中）
1871	明治 4	3 月 帝国陸軍において、松本順が兵部省病院御用掛となる 8 月 松本順が軍医頭（ぐんいのかみ）に任ぜられる
1872	明治 5	5 月 戸塚文海が海軍省五等出仕となる
1873	明治 6	5 月 松本順が陸軍軍医総監となる 5 月 陸軍少将相当官である陸軍軍医総監から、陸軍少尉相当官である陸軍軍医補までの階級が規定される 8 月 戸塚文海が、海軍大医監（海軍中佐相当）に就任
1876	明治 9	12 月 戸塚文海が海軍軍医総監となる
1878	明治 11	池田謙斎著／藤田嗣章訳『子宮病論』
1881	明治 14	7 月 森林太郎（鵬外）東京大学医学部を卒業 12 月 森林太郎（鵬外）が陸軍軍医副（中尉相当）となり、東京陸軍病院に勤務 エスマルク著／片山国嘉訳／石黒忠恵補訂『軍陣外科手術』
1884	明治 17	8 月 森林太郎（鵬外）軍陣衛生学研究のためドイツ留学 『陸軍医官徴兵検査手続』
1885	明治 18	2 月 森林太郎（鵬外）ドイツ語で「日本兵食論」、「日本家屋論」を執筆
1886	明治 19	小池正直述／森岡松太郎記『軍陣衛生』（1886～88年頃） 横井（信之）訳述／森岡松太郎筆記『保爾帝爾氏軍医袖珍必携 卷之二』（1880年代後半）
1887	明治 20	5 月 森林太郎（鵬外）は北里柴三郎とともにコッホを訪ね、衛生試験所に入所
1888	明治 21	9 月 森林太郎（鵬外）ドイツから帰国し、横浜港着
1889	明治 22	1 月 森林太郎（鵬外）『東京医事新誌』を主宰 石黒忠恵序文／森林太郎撰『陸軍衛生教程』
1890	明治 23	1 月 森鵬外『国民の友』に「舞姫」発表 10 月 石黒忠恵が陸軍軍医総監（少将相当）となる
1893	明治 26	11 月 森林太郎（鵬外）陸軍軍医学校長に任命される
1894	明治 27	8 月 日清戦争が始まり、森林太郎（鵬外）は中路兵站軍医部長に任命され出征 10 月 森林太郎（鵬外）台湾より帰国、陸軍軍医学校長に復職
1897	明治 30	4 月 石黒忠恵が新設の陸軍軍医総監（中将相当）となる 森 林太郎 小池正直『衛生新篇』
1904	明治 37	2 月 日露戦争が始まり、森林太郎（鵬外）は第二軍軍医部長に任命され 4 月に出征
1906	明治 39	1 月 森林太郎（鵬外）帰国
1907	明治 40	10 月 森林太郎（鵬外）が陸軍軍医総監・陸軍省医務局長となる 森 林太郎講述『衛生学大意』
1912	大正元	9 月 藤田嗣章が陸軍軍医総監となる
1928	昭和 3	6 月 張作霖爆殺事件（満州某重大事件）勃発 三菱航空機株式会社名古屋製作所『絵葉書』
1930	昭和 5	石黒大介『戦時衛生勤務研究録』
1931	昭和 6	9 月 柳条湖事件（満州事変勃発）
1935	昭和 10	満州帝国軍医団『軍医団雑誌』 創刊 『満州派遣記念写真帖 歩兵二十五連隊』

パネル E（1 枚目）

西暦	元号	関連事項年表（太字は本企画展で展示中）
1936	昭和 11	8 月 石黒大介が軍医総監となる 『週報』創刊
1937	昭和 12	7 月 盧溝橋事件が発生し、日中戦争全面戦争へ 『産業従業員の採用時身体検査法・定期健康診断法』 『写真週報』創刊 （日中戦争恩賜の包帯）（1937 年～）
1938	昭和 13	4 月 国家総動員法公布
1939	昭和 14	4 月 文部省が附属医学専門部設置についての大綱を立案 5 月 帝国大学・官立医科大学に臨時附属医学専門部設置することを閣議決定 5 月 名古屋帝国大学に臨時附属医学専門部を設置 9 月 陸軍省が帝国大学及官立医科大学臨時附属医学専門部に関して要望 藤田近二『戦場絵日記：藤田軍医少佐遺稿』
1940	昭和 15	9 月 『名大医学部学友会報』がこの月の第 60 号をもって休刊
1941	昭和 16	12 月 日本軍のマレー半島上陸および真珠湾攻撃で太平洋戦争が勃発 瀬戸英一『戦時衛生要務：軍陣外科ノ部』 （辞令 任陸軍軍医中佐）
1942	昭和 17	6 月 ミッドウェー海戦で日本軍が大敗 通信省『大東亜戦争記念報告絵葉書 第一輯』（1942 年頃） （勲三等瑞宝章）
1943	昭和 18	1 月 名古屋帝国大学が航空医学研究所を設置 9 月 学生の徴兵猶予が停止さる（「学徒出陣」） 三好益来、内藤桑三、本城正夫『戦時下傷者救急法』 三菱重工株式会社名古屋航空機製作所「兵器を造る我等の覚悟」 『佳木斯医科大学新聞』第 2 号（第 1 回生卒業記念号）
1944	昭和 19	3 月 汪兆銘が名古屋帝国大学附属医院に入院（同年 11 月、同医院で死去） 4 月 名古屋帝国大学が臨時附属医学専門部を附属医学専門部と改称 7 月 閣議、科学技術者動員計画設定要項を決定 7 月 海軍軍医学校戸塚分校に第一期生が入学 技術院『戦時研究員制度二就テ』 厚生省『職業能力申告手帳』 陸軍軍医学校編『軍隊臨床検査法教程：昭和 19 年制定』 グロウ、アームストロング共著／畠中靖雄、間澤久雄共訳『航空医学解説』 （名古屋帝国大学医学部アルバム）
1945	昭和 20	3 月 名古屋帝国大学医学部（鶴舞）が空襲で大きな被害を受ける 8 月 日本が連合国に無条件降伏 小熊悍『戦時研究と生物学』（科学朝日 第 5 巻第 8 号） 杉山千佐子『おみすてになるのですが一傷痕の半生一』 『シベリア抑留』俘虜用郵便葉書』（1945～49 年） 病院庶務掛「大東亜戦争戦災記念写真」
1946	昭和 21	11 月 日本国憲法公布 『名古屋市復興都市計画図』
1949	昭和 24	5 月 新制名古屋大学が設置され、附属医学専門部が包括される（1946 年度以降生徒募集中止） 『シベリア抑留』引揚証明書』
1950	昭和 25	4 月 附属医学専門部を廃止

パネル E（2 枚目）

注

- (1) これらについては、西川輝昭『名古屋大学博物館第四回特別展記録 名帝大けふ誕生―初代総長渋澤元治とその時代』（『名古屋大学博物館報告』第一八号、二〇〇二年十二月）、堀田慎一郎・山口拓史・羽賀祥二・西川輝昭『第一五回名古屋大学博物館企画展記録 伊吹おろしの若者たち―八高創立百年の歴史から』（『名古屋大学博物館報告』第二四号、二〇〇八年十二月）、堀田慎一郎『大学アーカイブズの展示活動とその諸問題―名古屋大学における「八高展」を事例に』（『名古屋大学文学資料室紀要』第一七号、二〇〇九年三月）、堀田慎一郎『企画展『医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念』（『名古屋大学文学資料室紀要』第一八号、二〇一〇年三月）、堀田慎一郎・西川輝昭・羽賀祥二・蛭薙観順・山口拓史『第一九回名古屋大学博物館企画展記録 医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念』（『名古屋大学博物館報告』第二七号、二〇一一年二月）、堀田慎一郎『企画展『響け！ 創統の鐘―名高商から名大経済学部への九〇年』（『名古屋大学文学資料室紀要』第一九号、二〇一二年三月）、西田佐知子・堀田慎一郎・松下佐知子『第二八回名古屋大学博物館企画展記録「氷壁」を越えて―ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯』（『名古屋大学博物館報告』第二九号、二〇一三年二月）、堀田慎一郎『企画展『氷壁』を越えて―ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯』（『名古屋大学文学資料室紀要』第二二号、二〇一四年三月）を参照。
- (2) この企画展の詳細については、蒲生英博・堀田慎一郎『企画展『戦争と大学―一九三一―一九四五 官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学』（『名古屋大学文学資料室紀要』第二三号、二〇一五年三月）を参照。以下、本展記録において、この企画展について記述する場合は、特にことわらない限りこれによるものとする。
- (3) ただし医学部史料室は、名古屋大学医学部及びその前身学校の歴史に関する資料のほか、広く医学や医療の歴史に関する資料も所蔵しており（蒲生英博『近代医学の黎明デジタルアーカイブ』と企画展による医学史料の新たな展開）、『医学図書館』第六三巻第一号、二〇一六年三月）、基本的に収集・所蔵を名古屋大学およびその前身学校の歴史に関する資料に限定している大学文学資料室とはやや性格が異なっている。

- (4) ミニ企画展は、第一二回（「名古屋のセンパイ！ 大正・昭和編―名古屋大学全学同窓会大学支援事業（2）―」）までは「ミニ展示会」と称していた。ミニ企画展及び開催の詳細は、蒲生英博『近代医学の黎明デジタルアーカイブ』と企画展による医学史料の新たな展開（『医学図書館』第六三巻一号、二〇一六年三月）を参照。名古屋大学学術機関リポジトリ (<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/spu/handle/2237/24532>) でも公表されている。
- (5) この企画展の詳細は、蒲生英博／堀田慎一郎「企画展『戦争と大学―一九三〇―一九四五 官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学―』」（『名古屋大学文学書資料室紀要』第二三号、二〇一五年三月）を参照。名古屋大学学術機関リポジトリ (<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/spu/handle/2237/21663>) でも公表されている。
- (6) 平成二六年度第二回名古屋大学全学同窓会大学支援事業の助成金を得た。事業の名称は、『名古屋大学の大先輩』コレクションの形成と展示会の開催で、購入したコレクションは、第一二回企画展「名古屋のセンパイ！ 明治編―名古屋大学全学同窓会大学支援事業（1）―」と、第一二回企画展「名古屋のセンパイ！ 大正・昭和編―名古屋大学全学同窓会大学支援事業（2）―」で公開した。
- (7) 『パイプのけむり』に「ふたたび」という巻は無いが、「又」、「まだ」、「も一つ」といった軽い語感に惹かれた。
- (8) 第十回ミニ企画展から、関連するテーマによる特別講演会を開催している。本稿執筆時点で予定も含めると、次のとおりである。第十回ミニ企画展の特別講演会 青木國雄（名古屋大学名誉教授）「わが国の疫病（伝染病）流行とその社会的衝撃」（二〇一五年七月一〇日、第一一回は山内一信（名古屋大学名誉教授・東員病院院長）「尾張医学の大先輩 伊藤圭介―その医学と本草学―」（二〇一六年一月二七日）、第二回は高橋昭（名古屋大学名誉教授・愛知医科大学客員教授）「衛生の道を拓き 雄大な先駆的視野に立つて辣腕をふるった 愛知医学学校長後藤新平」（二〇一六年三月一五日）、第三回は大川四郎（愛知大学法学部教授）「第二次世界大戦中の赤十字と名古屋大学」（二〇一六年九月三〇日）、第四回は福田真人（名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授）「結核のロマン化と病気の本質」（二〇一六年二月一六日）、第五回は吉川卓治（名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授）「医育統一・インチキ学校征伐・官立医大不振―医育の一九三〇年代―」。なお、会場は、いずれも医学部分館の西隣にある建物、医学部基礎研究棟の一階会議室2である。

- (9) この取材の後、次の二つの記事が朝日新聞に掲載された。「語り継ぐ戦争31 主砲発射、地震のような揺れ 大和の元軍医 祖父逸郎さん(95)」(二〇一六年二月一六日 朝刊地域総合)。「救われず71年 空襲、見捨てられた民 1/27」(二〇一六年二月一六日)二〇一七年一月三二日 夕刊全国版
- (10) 月一回開催。室長(理事兼任)、歴史公文書部門長(総務部長兼任)、歴史資料・大学史編纂部門長(教授兼任)、室員(筆者を含め二名の専任)、総務部総務課員二名を構成メンバーとする。
- (11) 主催・愛知県立大学日本文化学部、愛知県総務部法務文書課県史編さん室、共催・愛知県立大学地域連携センター、協力・名古屋大学附属図書館医学部分館、名古屋大学大学文書資料室、愛知・名古屋 戦争に関する資料館、日時・二〇一七(平成二九)年一月二九日(日) 一三時～一五時三〇分、会場・愛知県立大学長久手キャンパス特別講義棟(S棟) S二〇一、申込不要・入場無料。
- (12) 主催・愛知県立大学日本文化学部、愛知県総務部法務文書課県史編さん室、愛知県立大学長久手キャンパス図書館、協力・名古屋大学附属図書館医学部分館、名古屋大学大学文書資料室、愛知・名古屋 戦争に関する資料館、会期・二〇一六(平成二八)年二月一五日(木)～二〇一七年一月三一日(火)、会場・愛知県立大学長久手キャンパス図書館「階ロビー」、入場無料。
- (13) 前掲、蒲生・堀田「企画展『戦争と大学』一九三二～一九四五 官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学」。
- (14) このホームカミングデイでも、資料室と附属図書館医学部分館の共催で、名古屋大学創基二四五周年記念展「仮病院・仮学校から名古屋帝国大学への道」を実施した。
- (15) 作業のしやすさも考え、大学文書資料室が最近の企画展で使っている形式にした。また、旧字体は新字体に直し、文字を大きくするとともに、字数も一〇行(二八〇字)を絶対に超えないように制限した。また、会場の構造上、コーナーの区分を明らかにしづらいため、コーナーごとにキャプションの枠の色を変えるようにした。
- (16) ただし、名古屋大学のアーカイブズとしての活動を通じて、アーカイブズ学の研究もその任務の一つとしている。
- (17) 利用(閲覧・写しの交付)の方法については、資料室のホームページを参照。
- (18) そのほか、本企画展の会期中に発行された『名大トピックス』第二八三号の「ちよつと名大史コーナー」で、この医学専門部

を取り上げた。名古屋大学あるいは資料室のホームページで閲覧できる。

（がもう・ひでひろ 附属図書館医学部分館／ほった・しんいちろう 大学文書資料室）